

# PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2003-150766  
(43)Date of publication of application : 23.05.2003

(51)Int.Cl.

606F 17/60

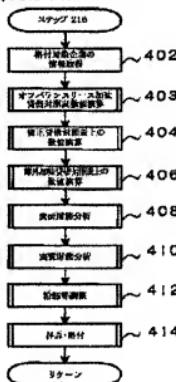
(21)Application number : 2001-352552  
(22)Date of filing : 19.11.2001

(71)Applicant : SHINKIN CENTRAL BANK  
(72)Inventor : KOJIMA KAZUYASU

## (54) CREDIT RATING METHOD, ITS DEVICE, RECORDING MEDIUM, AND PROGRAM

### (57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a credit rating method for performing credit rating where the substantial financial strength of a smaller enterprise is reflected. SOLUTION: Numerical values on an off-balance-sheet are calculated based on a balance sheet (B/S) and off-balance additional information (403). The numerical values on a corrected B/S are calculated which are obtained by excluding a portion of unsound asset in the off-B/S based on the off-B/S and finance additional information (404). Calculation is performed concerning a first financial index which multilaterally expresses the superficial finance strength of the enterprise based on the numerical values of the B/S, the corrected B/S and a profit-and-loss statement and also concerning a second financial index which multilaterally expresses the substantial financial strength of the enterprise (408 and 410). The first and second financial indexes are marked in response to a predetermined first mark reference and added. It is decided in which one of a plurality of rating divisions a credit degree of the enterprise belongs, which is predetermined in response to the added marks (414).



(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2003-150766

(P2003-150766A)

(43)公開日 平成15年5月23日 (2003.5.23)

(51)Int.Cl.<sup>7</sup>  
G 0 6 F 17/60

識別記号  
1 6 6  
2 0 4

F I  
G 0 6 F 17/60

テ-ヤ-コ-ト<sup>8</sup> (参考)  
1 6 6  
2 0 4

(21)出願番号 特願2001-352552(P2001-352552)

(22)出願日 平成13年11月19日 (2001.11.19)

(71)出願人 500115125

信金中央金庫

東京都中央区京橋3丁目8番1号

(72)発明者 小島 一泰

東京都中央区京橋3丁目8番1号 信金中央金庫内

(74)代理人 100104721

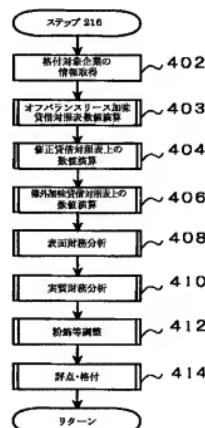
弁理士 五十嵐 俊明

(54)【発明の名称】 信用格付方法、記録媒体、信用格付装置及びプログラム

(57)【要約】

【課題】 中小企業の実質的財務体質を反映した信用格付を行うことができる信用格付方法を提供する。

【解決手段】 貸借対照表(B/S)とオフバランス追加情報とに基づきオフバランスB/S上の数値を演算し(403)、オフバランスB/Sと財務追加情報とに基づきオフバランスB/Sの資産の不健全全分を排除した修正B/S上の数値を演算し(404)、B/S、修正B/S及び損益計算書上の数値に基づき企業の表面的財務体質を多面的に表す第1財務指標及び企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算し(408、410)、予め定められた第1評点基準に従って第1及び第2財務指標を評点して加算し、加算された評点に応じて予め定められた企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定する(414)。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行なう信用格付方法であつて、

貸借対照表上の数値と、リース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となつてゐるオフバランスリース資産に関するオフバランス追加情報とに基づいて、前記オフバランスリース資産を前記貸借対照表における資産として加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算し、

前記オフバランス貸借対照表上の数値と、前記貸借対照表及び損益計算書上の部分的な実質数値を表す財務追加情報とに基づいて、前記オフバランス貸借対照表の不健全資産を排除した修正貸借対照表上の数値を演算し、前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値に基づいて、前記企業の表面的な財務体質を多面的に表す第1財務指標及び前記企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算し、

予め定められた第1評点基準に従つて前記第1及び第2財務指標を評点として加算し、

前記加算された評点に応じて、予め定められ企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいすれに属するかを判定する、ステップを含む信用格付方法。

【請求項2】 更に、前記修正貸借対照表上の数値と前記財務追加情報とに基づいて、会計処理外となつてゐる資産を加味した会計処理外資産加味貸借対照表上の数値を演算し、前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値並びに前記会計処理外資産加味貸借対照表上の数値に基づいて前記第2財務指標を演算することを特徴とする請求項1に記載の信用格付方法。

【請求項3】 前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値並びに前記会計処理外資産加味貸借対照表上の数値に基づいて、前記貸借対照表及び前記損益計算書上の数値の実体的数値からの乖離の程度を表す第3財務指標を演算し、予め定められた第2評点基準に従つて前記第3財務指標を評点し、該評点を前記加算された評点から減算して、該減算された評点に応じて、予め定められ企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいすれに属するかを判定することを特徴とする請求項2に記載の信用格付方法。

【請求項4】 前記オフバランス貸借対照表は、前記オフバランスリース資産に見合うように、前記オフバランスリース資産に関するリース料のうち未払金を負債として加味したことを特徴とする請求項1乃至請求項3のいすれか1項に記載の信用格付方法。

【請求項5】 前記オフバランス貸借対照表は、前記リース料のうち、費用化の期限が決算日の翌日から起算して1年以内に到来するものを流动負債に、費用化の期限が決算日の翌日から起算して1年を超えて到来するものを固定負債に加味したことを特徴とする請求項4に記載の信用格付方法。

【請求項6】 前記オフバランス追加情報のうち前記オフバランスリース資産の額が未入力のときに、前記オフバランス追加情報に含まれる支払リース料の額についての情報又は販売費・一般管理費明細及び製造原価明細上のうち賃借料・リース料の割についての情報に基づいて、前記オフバランスリース資産の額を推定することを特徴とする請求項1乃至請求項5のいすれか1項に記載の信用格付方法。

【請求項7】 前記オフバランス追加情報は割賦契約による物件の割賦買掛金の額の情報及び手形で購入した物件の支払手形の額の情報を更に含み、前記オフバランス貸借対照表は前記割賦買掛金の額及び前記支払手形の額を負債の内訳として含むことを特徴とする請求項1乃至請求項6のいすれか1項に記載の信用格付方法。

【請求項8】 前記修正貸借対照表は、少なくとも預かっている消費税、源泉所得税及び社会保険料のうちいすれかの滞納分を流动資産の現金・預金から固定資産性の預金として分離したことを特徴とする請求項1乃至請求項7のいすれか1項に記載の信用格付方法。

【請求項9】 前記会計処理外資産加味貸借対照表は、少なくとも預かっている消費税、源泉所得税及び社会保険料のうちいすれかの滞納分を流动資産の現金・預金から固定資産に組み入れたことを特徴とする請求項2乃至請求項7のいすれか1項に記載の信用格付方法。

【請求項10】 前記滞納分が前記分離後の現金・預金の額を超えるときに該超えた額を借入金に準ずる負債として演算し、該借入金に準ずる負債に基づいて前記第2及び第3財務指標を演算することを特徴とする請求項8又は請求項9に記載の信用格付方法。

【請求項11】 請求項1乃至請求項10のいすれか1項に記載の信用格付方法を記録したコンピュータ読取可能な記録媒体。

【請求項12】 企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行なう信用格付装置において、  
貸借対照表上の数値と、リース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となつてゐるオフバランスリース資産に関するオフバランス追加情報とに基づいて、前記オフバランスリース資産を前記貸借対照表における資産として加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算するオフバランス貸借対照表数値演算手段と、  
前記オフバランス貸借対照表上の数値と、前記貸借対照表及び損益計算書上の部分的な実質数値を表す財務追加情報とに基づいて、前記オフバランス貸借対照表の不健全資産を排除した修正貸借対照表上の数値を演算する修正貸借対照表数値演算手段と、

前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値に基づいて、前記企業の表面的な財務体質を多面的に表す第1財務指標及び前記企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算する指標演算手段

と、

予め定められた第1評点基準に従って前記第1及び第2財務指標を評点して加算する加点手段と、

前記加算された評点に応じて、予め定められ企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定する判定手段と、を備えた信用格付装置。

【請求項1-3】企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行うプログラムであって、コンピュータを、貸借対照表上の数値と、リース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となっているオフバランスリース資産に関するオフバランス追加情報とともに基づいて、前記オフバランスリース資産を前記貸借対照表における資産として加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算するオフバランス貸借対照表数値演算手段、前記オフバランス貸借対照表上の数値と、前記貸借対照表及び損益計算書上の部分的な実質数値を表す財務追加情報に基づいて、前記オフバランス貸借対照表の不健全資産を排除した修正貸借対照表上の数値を演算する修正貸借対照表数値演算手段、

前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値に基づいて、前記企業の表面的財務体質を多面的に表す第1財務指標及び前記企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算する指標演算手段、予め定められた第1評点基準に従って前記第1及び第2財務指標を評点して加算する加点手段、

前記加算された評点に応じて、予め定められ企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定する判定手段、として機能させるためのプログラム。

#### 【発明の詳細な説明】

##### 【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は信用格付方法、記録媒体、信用格付装置及びプログラムに係り、特に、企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行う信用格付方法、該方法を記録した記録媒体、該信用格付装置及び該プログラムに関する。

##### 【0002】

【従来の技術】従来、金融機関及び金融関連機関では、自己の取引先企業に対する与信限度額を定めたり当該取引先の財務体質向上のために信用格付を行っている。このような信用格付は一般に、貸借対照表や損益計算書等の財務諸表上に表された数値から、総資本経常利益率、売上高経常利益率、総資本回転率、流動比率、固定長期適合率、自己資本比率、経常収支比率、売上高推移、当期利益推移、自己資本額等の財務指標を算出して、多面的に収益性、効率性、安全性、成長性、企業規模等について評価・評点することで、債務者区分(正常先、要注意先、破綻懸念先、実質破綻先、破綻先)のいずれに該当するかを決定するものである。ここに、信用格付とは、債務者の信用リスクの程度に応じた格付をいい、信

用リスク管理のために不可欠なものであるとともに、正確な自己査定及び適正な償却・引当の基礎となるものであり、債務者区分と整合的でなければならない、とされている(平成11年4月、金融監督庁発表の金融検査マニュアル)。

【0003】このような信用格付方法によれば、上場企業等の大企業では監査役や公認会計士が財務諸表を監査しているので、財務諸表から得られた財務指標や債務者区分はほぼその企業の財務体質を反映しており、金融機関等にとって与信判断上有効な基準となっている反面、中小企業では経営者、特に、代表者と企業との関係が大企業の場合より密接であるため、大企業の場合と同様の信用格付方法により財務諸表から直接信用格付を行うと、その中小企業の本来の財務体質とは乖離した信用格付となってしまう、という問題がある。例えば、預金を例に探れば、大企業では融資に対する協力預金(非拘束)であるのに対し、中小企業では融資の担保として拘束されることもあるので、算出される当座比率や流動比率が同一値でも、その意味合いが異なってくる。また、

中小企業では、会社と代表者個人の金銭が混在している場合もあり得るので、給与・報酬が法人税対策に利用されることもある。更に、企業が代表者個人から借入をしている場合には、負債というより、むしろ劣後ローン的な性格を有する自己資本に近いものとなる。

【0004】このため、金融機関の中小企業に対する信用格付では、当該企業の財務体質との乖離を避けるために、財務面及び非財務面双方の評価を総合的に行うことによって判断されている。すなわち、金融機関では企業に対して担当者を設定して、財務面では当該企業の最新の経営情報を把握し、非財務面では経営者の資質やその企業が属する業界の動向を把握することにより、これらの要素を加味して信用格付が行われている。

##### 【0005】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、中小企業の経営状況を総合的に判断する場合には、担当者の意図性が入り込み余地が大きいので、加味した要素の客觀性や合理性を検討しないまま信用格付がなされると誤った企業評価につながり易く、結果として金融機関にとつて過大なリスクとなったり、企業にとって本来融資可能なはずの資金の提供が制限されてしまう、という問題点がある。

【0006】また、財務面及び非財務面で加味した新たな要素を加える場合にも、他の企業の信用格付との整合性を検討したり、加味した新たな要素をどの程度の大きさとして捉えるかも、技術的に難しい点である。例えば、運輸業の場合には、車両1台でも業を営むことができるため算入が比較的容易であることから小規模企業が多い。このような業種では、車両等の主要設備の調達方法として、リース、割賦、手形等が挙げられるが、主要設備の会計処理が専外で行われていたり、主要設備が通

正な減価償却がなされていない場合もみられる。また、小規模企業では、従業員等から預かった消費税、源泉所得税、社会保険料等が運転資金に用いられ、しばしば滞納する場合もみられる。これらの数値は貸借対照表、損益計算書等の財務諸表上の数値だけでは判別しにくい。

【0007】本発明は上記事案に鑑み、中小企業の実質的財務体質を反映した信用格付を行うことができる信用格付方法、記録媒体、信用格付装置及びプログラムを提供することを課題とする。

#### 【0008】

【課題を解決するための手段】上記課題を解決するために、本発明の第1の態様は、企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行う信用格付方法であって、貸借対照表上の数値と、リース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となっているオフバランスリース資産に関するオフバランス追加情報に基づいて、前記オフバランスリース資産を前記貸借対照表における資産として加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算し、前記オフバランス貸借対照表上の数値と、前記貸借対照表及び損益計算書上の部分的な実質数値を表す財務追加情報に基づいて、前記オフバランス貸借対照表の不健全資産を排除した修正貸借対照表上の数値を演算し、前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値に基づいて、前記企業の表面的財務体質を多面的に表す第1財務指標及び前記企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算し、予め定められた第1評点基準に従って前記第1及び第2財務指標を評点にて算出し、前記加算された評点に応じて、予め定められた企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定する、ステップを含む。

【0009】本態様では、貸借対照表にリース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となっているオフバランスリース資産を反映するために、オフバランスリース資産を加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算し、健全な貸借対照表を把握するために、オフバランス貸借対照表から健全資産を排除した修正貸借対照表上の数値を演算するので、オフバランスリース資産を多く内在する業種に属する企業について、貸借対照表及び損益計算書等の財務情報のみを基礎とする場合より実体に則した財務情報を得ることができると共に、貸借対照表、修正貸借対照表及び損益計算書上の数値に基づいて、企業の表面的財務体質を多面的に表す第1財務指標及び実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算して信用格付を行うので、表面的財務体質を表す第1財務指標のみで企業の信用格付を行う場合よりも、企業の実体を反映した信用格付を行うことができる。

【0010】本態様において、修正貸借対照表上の数値と財務追加情報に基づいて、会計処理外となっている資産を加味した会計処理外資産加味貸借対照表上の数値

を更に演算し、第2財務指標を、貸借対照表、修正貸借対照表及び損益計算書上の数値並びに会計処理外資産加味貸借対照表上の数値に基づいて演算するようすれば、会計処理外資産加味貸借対照表上の数値を踏まえて第2財務指標を演算することができるので、より実体を反映した信用格付を行うことが可能となる。このとき、貸借対照表、修正貸借対照表及び損益計算書上の数値並びに会計処理外資産加味貸借対照表上の数値に基づいて、貸借対照表及び損益計算書上の数値の実体的数値からの乖離の程度を表す第3財務指標を演算し、予め定められた第2評点基準に従って第3財務指標を評点し、該評点を前記加算された評点から減算して、該減算された評点に応じて、予め定められた企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定するようすれば、貸借対照表及び損益計算書が実体から乖離した程度に応じて信用格付のための評点が減算され一層企業の実体を反映した評点となるので、精度の高い信用格付を行うことができる。

【0011】また、本態様において、オフバランス貸借対照表が、オフバランスリース資産に見合うように、オフバランスリース資産に関するリース料のうち未払金を負債として加味するようにしてもよい。このとき、オフバランス貸借対照表を、リース料のうち、費用化の期限が決算日の翌日から起算して1年以内に到来するものを流动負債に、費用化の期限が決算日の翌日から起算して1年を超えて到来するものを固定負債に加味することが好ましい。更に、オフバランス追加情報のうちオフバランスリース資産の額が未入力のときに、オフバランス追加情報に含まれる支払リース料の額についての情報又は販売費・一般管理費明細及び製造原価明細上のうち賃借料・リース料の額についての情報に基づいて、オフバランスリース資産の額を推定するようすれば、常にオフバランス貸借対照表上の数値を得ることが可能となる。また、オフバランス追加情報による物件の割賦買掛金の額の情報及び手形で購入した物件の支払手形の額の情報を更に含み、オフバランス貸借対照表は割賦買掛金の額及び支払手形の額を負債の内訳として含むようすれば、主要設備の調達方法がリース以外であっても包括的に資産内容を把握することができるので、信用格付の精度を更に高めることができる。更に、修正貸借対照表又は会計処理外資産加味貸借対照表上で、少なくとも預かっている消費税、源泉所得税及び社会保険料のうちいずれかの滞納分を流动資産の現金・預金から固定資産の預金として分離するようすれば、過済順位の高い債務を流动資産の現金・預金から区別することができるの、健全な流动資産の把握が可能となる。このとき、滞納分を流动資産の現金・預金から固定資産に組み入れるようにもよく、滞納分が分離後の現金・預金の額を超えるときに該超えた額を借入金に準する負債として演算し、該借入金に準する負債に基づいて第2及

び第3財務指標を演算するようにすれば、一層実体に近い貸借対照表とすることができます。

【0012】また、本発明の第2の態様は、上述した第1の態様の信用格付方法を記録したコンピュータ読み取可能な記録媒体である。更に、本発明の第3の態様は、企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行う信用格付装置において、貸借対照表上の数値と、リース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となっているオフバランスリース資産に関するオフバランス追加情報に基づいて、前記オフバランスリース資産を前記貸借対照表における資産として加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算するオフバランス貸借対照表数値演算手段と、前記オフバランス貸借対照表上の数値と、前記貸借対照表及び損益計算書上の部分的な実質数値を表す財務追加情報に基づいて、前記オフバランス貸借対照表の不健全資産を排除した修正貸借対照表上の数値を演算する修正貸借対照表数値演算手段と、前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値に基づいて、前記企業の表面的な財務体質を多面的に表す第1財務指標及び前記企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算する指標演算手段と、予め定められた第1評点基準に従って前記第1及び第2財務指標を評点して加算する加点手段と、前記加算された評点に応じて、予め定められ企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定する判定手段と、を備えている。そして、本発明の第4の態様は、企業の財務諸表を分析して該企業の信用格付を行うプログラムであって、コンピュータを、貸借対照表上の数値と、リース契約により使用しているリース物件のうち会計処理が簿外となっているオフバランスリース資産に関するオフバランスリース資産を前記貸借対照表における資産として加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算するオフバランス貸借対照表数値演算手段、前記オフバランス貸借対照表上の数値と、前記貸借対照表及び損益計算書上の部分的な実質数値を表す財務追加情報に基づいて、前記オフバランス貸借対照表の不健全資産を排除した修正貸借対照表数値演算手段、前記貸借対照表、前記修正貸借対照表及び前記損益計算書上の数値に基づいて、前記企業の表面的な財務体質を多面的に表す第1財務指標及び前記企業の実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算する指標演算手段、予め定められた第1評点基準に従って前記第1及び第2財務指標を評点して加算する加点手段、前記加算された評点に応じて、予め定められ企業の信用の程度を複数に区分した信用区分のいずれに属するかを判定する判定手段、として機能させるためのプログラムである。

【0013】

【発明の実施の形態】以下、図面を参照して、本発明

を、信用金庫の取引先（以下、信用格付対象企業といふ。）が運輸業であることを想定して、当該信用格付対象企業に対する信用格付を行う信用格付システムに適用した実施の形態について説明する。

【0014】（構成）図1に示すように、本実施形態の信用格付システムでは、秘密を保持するために外部ネットに対して閉じられたインターネット等のネットワーク101を備えている。ネットワーク101には、各信用金庫のコンピュータ端末102、103が専用回線又は公衆回線を介して接続される。

【0015】また、ネットワーク101には、各信用金庫の依頼に応じて企業の信用格付を行う企業信用格付サイト110が接続されている。企業信用格付サイト110は、企業信用格付サイト110外部からの不正アクセスに対して武装するためのファイアウォール111を備えている。ネットワーク101は、このファイアウォール111を介して、後述するように信用格付を行う、オフバランス貸借対照表数値演算手段、修正貸借対照表数値演算手段、指標演算手段、加点手段及び判定手段としてのネットワークサーバ112に接続されている。ネットワークサーバ112は、企業信用格付サイト110内に張られたバス型のLAN114に接続されている。LAN114には、各信用金庫から送信されたファイル情報及びネットワークサーバ112が演算した財務上の数値を格納するためのデータベースサーバ113が接続されている。

【0016】（動作）次に、フローチャートを参照して企業信用格付サイト110の動作について説明する。コンピュータ端末102（又は、103）からのアクセスがあると、企業信用格付サイト110のネットワークサーバ112は、企業の信用格付を行うための信用格付ルーチンを実行する。

【0017】図2に示すように、この信用格付ルーチンでは、まず、ステップ202において、顧客開設、すなわち、データベースサーバ113に登録のない信用格付対象企業に対して新たに信用格付を行うための基本情報の取り込みが専門家を判断する。なお、コンピュータ端末102側では、メニュー画面に複数のボタンが配置され、それらのボタンにはVB（Visual Basic）、C++等の言語で記述されたプログラムが割り当てられており、「顧客開設」をクリックすることで顧客開設であることをネットワークサーバ112に通知可能とされている（以下、後述する登録、格付依頼、ダウンロード、データ修正等についても同じ。）。ステップ202での判断が肯定されたときは、ステップ212において、信用金庫の店番号、信用格付対象企業の口座番号（顧客番号）、当該企業の名称、住所、業種コード（本例では運輸業のコード）、会社設立年月等の基本情報を取り込む開設処理を実行して、信用格付ルーチンを終了する。

【0018】一方、ステップ202での判断が否定され

たときは、次のステップ204において、財務情報の登録か否かを判断し、否定判断のときはステップ206に進み、肯定判断のときはステップ214において、財務情報ファイルのファイル情報を取り込むためのファイル情報取込処理サブルーチンが実行される。

【0019】図3に示すように、このファイル情報取込処理サブルーチンでは、ステップ302において財務諸表の受信か否かを判断する。なお、コンピュータ端末102側では、メニュー画面の「登録」がクリックされると、「財務諸表の送信」「追加情報の送信」「債務情報の送信」のボタンが配置されたサブメニューが表示され、いずれかのボタンがクリックされることにより、ボタンに割り当てられたプログラムによりネットワークサーバー112に財務諸表、追加情報、債務情報のいずれの送信であるかを判定可能とさせている。

【0020】ステップ302で肯定判断されたときは、ステップ306において、財務諸表を取り込んでデータベースサーバ113に格納する。これらの財務諸表は、図12、図13及び図14に示すように、当期、前期、2期前及び3期前の貸借対照表（以下、B/Sと略記する。）、損益計算書（以下、P/Lと略記する。）、並びに、販売費・一般管理費明細および製造原価明細（以下、M/Cと略記する。）上の数値である。一方、ステップ302で否定判断されたときは、次のステップ304において、追加情報（以下、A/Iと略記する。）の受信か否かを判断し、肯定判断のときはステップ308においてA/Iを取り込んでデータベースサーバ113に格納し、否定判断のときはステップ310において財務情報を取り込んでデータベースサーバ113に格納して、ファイル情報取込処理サブルーチン及び信用格付ルーチンを終了する。

【0021】このA/Iには、オフバランスリース資産等を加味するためのオフバランス追加情報とB/S、P/L及びM/C上に現れない信用格付対象企業の財務上の部分的な実体を表す財務追加情報が含まれている。

【0022】図15に示すように、オフバランス追加情報はオフバランスリース資産に関する狭義の（請求項上の）オフバランス追加情報（図15に「オフバランス」と記載）と、狭義のオフバランス追加情報以外の情報とを含み、（長期）割賦買掛金OFA（OFA<sub>1</sub>、OFA<sub>2</sub>）、（長期）リース未払金OFB（OFB<sub>1</sub>、OFB<sub>2</sub>）、設備（長期）支払手形OFC（OFC<sub>1</sub>、OFC<sub>2</sub>）、滞納税金等OFD（OFD<sub>1</sub>～OFD<sub>5</sub>）、支払リース料OFE（OFE<sub>1</sub>、OFE<sub>2</sub>）、車輌に係る処分損OFF（OFF<sub>1</sub>）、オフバランスリース資産OFG（OFG<sub>1</sub>）、オフバランス（長期）リース未払金O FH（OFH<sub>1</sub>、OFH<sub>2</sub>）及びオフバランスリース資産に係る減価却実施額O FJ（O FJ<sub>1</sub>）についての当期、前期、2期前及び3期前の情報で構成されている。（長期）割賦買掛金OFA、（長期）リース未払金

O F B、設備（長期）支払手形O F C、滞納税金等O F D、支払リース料O F E及び車輌に係る処分損O F Fについて、決算書類の付属明細書等から信用金庫の信用格付対象企業の担当者により把握された数値が入力され、オフバランスリース資産O F G、オフバランス（長期）リース未払金O F H及びオフバランスリース資産に係る減価却実施額O F Jについては、財務諸表の注記、決算書類の付属明細書及びリース台帳等から把握された数値が入力される。なお、図15において、「-」はこのような把握ができず、未入力とした場合を示している。

【0023】買掛金のうち割賦買掛金O FA<sub>1</sub>、買掛金のうちリース未払金O FB<sub>1</sub>、その他の流動負債のうち設備支払手形O FC<sub>1</sub>とは、それぞれ、割賦金の支払日、費用化の期限（リース料の支払日）、設備の建設・固定資産の購入等その他通常の取引以外の取引に基づいて発生した手形債務の支払期限、が決算日の翌日から起算して1年内に到来するものをいい、その他の固定負債のうち長期割賦買掛金O FA<sub>2</sub>、その他の固定負債のうち長期リース未払金O FB<sub>2</sub>、その他の固定負債のうち設備長期支払手形O FC<sub>2</sub>とは、それぞれ、割賦金の支払日、費用化の期限（リース料の支払日）、設備の建設・固定資産の購入等その他通常の取引以外の取引に基づいて発生した手形債務の支払期限、が決算日の翌日から起算して1年を超えて到来するものをいい。特に、運輸業では、主要設備である車輌の調達方法が金融機関等からの借入金によるもの以外に、割賦による方法、リースによる方法、手形による方法等があるので（全額キャッシュという方法もあるが殆ど用いられない。）、これらの調達方法による勘定科目を借入金に準する負債として取り扱うことが妥当である。

【0024】また、滞納税金等O FDとは販売先や從業員等から預かっている消費税、源泉所得税、社会保険料等のうち納付期限まで納付しなかったものをいい、差押の対象となることから極めて返済順位の高い負債とみることができる。支払リース料O FE<sub>1</sub>は販売先・一般管理費に計上されている賃借料・リース料のうちのリース料であり、支払リース料O FE<sub>2</sub>は製造原価に計上されている賃借料・リース料のうちリース料である。固定資産処分損のうち車輌に係る処分損O FF<sub>1</sub>とは特別損失に計上されている固定資産処分損のうち車輌に係るものをいい。オフバランスリース資産O FG<sub>1</sub>とは、リース契約に基づき使用している物件のうち、会計処理が薄外となっているものをい。オフバランスリース未払金O FH<sub>1</sub>とは費用化の期限（リース料としての支払期限）の決算日の翌日から起算して1年内に到来するものうち会計処理が薄外となっているものい。オフバランスリース未払金O FH<sub>2</sub>とは費用化の期限（リース料としての支払期限）の決算日の翌日から起算して1年を超えて到来するものうち会計処理が薄外となつていて

るものをいう。オフバランスリース資産に係る減価償却実施額O F J<sub>1</sub>とは当年度決算に計上した支払リース料のうち減価償却費に相当する額をいう。従って、オフバランス追加情報には、運輸業の業態に関連した資産、負債上の詳細な情報が含まれている。

【0025】図16に示すように、財務追加情報は、回転期間により算出される不健全流动資産L<sub>1</sub> (L<sub>1</sub> ~ L<sub>8</sub>)、その他流动資産のうち換金可能額M<sub>1</sub> (M<sub>1</sub> ~ M<sub>8</sub>)、減価償却費不足額N<sub>1</sub> (N<sub>1</sub>)、有価証券・投資有価証券および不動産に係る含み損益P<sub>1</sub> (P<sub>1</sub> ~ P<sub>8</sub>)、投資その他 (投資その他のうちその他の他を除く) のうちの換金可能額Q<sub>1</sub> (Q<sub>1</sub> ~ Q<sub>8</sub>)、その他の投資における不健全資産R<sub>1</sub> (R<sub>1</sub>)、繰延資産のうちの換金可能額S<sub>1</sub> (S<sub>1</sub>)、代表者等からの借入の状況T<sub>1</sub> (T<sub>1</sub> ~ T<sub>8</sub>)、オフバランス損益U<sub>1</sub> (U<sub>1</sub> ~ U<sub>8</sub>)及び固定資産性預金A確定額V<sub>1</sub> (V<sub>1</sub>)についての当期、前期、2期前及び3期前の情報で構成されている。ここで、「投資その他のうちその他の他」とは、投資有価証券、長期貸付金、差入保証金及び不渡手形 (投資その他で計上されているもの)、固定化営業債権を除くものをいう。なお、現金・預金架空計上確定額L<sub>1</sub>、受取手形貸倒・架空計上確定額L<sub>2</sub>、売掛金貸倒・架空計上確定額L<sub>3</sub>、棚卸資産不良・架空計上確定額L<sub>5</sub>等の図16に示した財務追加情報は、信用金庫の担当者が信用格付対象企業の経営者等との面接ヒアリングや実地調査などを行い、当該企業の業況・財務内容、各勘定科目の相手先の業況等から換金可能か否かの判断を加えた上で最終的に確定した数値が入力される。従って、財務追加情報には、B/S及びP/L上の不健全な財務の部分的な実体が表されている。

【0026】また、債務情報は、図17に示すように、対象企業の支払の延滞状況及び借入債務状況についての情報であり、マトリックス内のいずれかを選択して入力される (例えば、債務状況が、債務超過なし、赤字・繰越損なしの通常先で、支払状況が、1ヵ月以上3ヵ月末満延滞している場合に該当するときは、括弧内のC1が債務情報として入力される)。なお、図17において、特定先とは共同債権買取機構・整理回収機構・自己競落会社等をいい、特例先とは特別な事情により今後の管理に注意を要する企業をいい、通常先とは特例先以外の企業をいう。

【0027】次に、図2のステップ206では、格付依頼か否かの判断を行い、否認判断のときはステップ208へ進み、肯定判断のときはステップ216において信用格付対象企業の信用格付を行ふための格付処理サブルーチンを実行する。

【0028】図4に示すように、この格付処理サブルーチンでは、ステップ402において、ステップ212、306、308、310でデータベースサーバー13に格納した信用格付対象企業の業種情報 (本例では運輸

業)、財務諸表、A/I及び債務情報を読み出してRAM上に展開し、次のステップ403において、B/Sとオフバランス追加情報からオフバランスリース資産等を加味した貸借対照表 (以下、オフバランスB/Sといふ。) 上の数値を演算するためのオフバランス加味貸借対照表数値演算サブルーチンが実行される。このオフバランスリース加味貸借対照表数値演算サブルーチンでの演算について一言すれば、図19(A)に示すB/S (図12に示したB/Sを圧縮して模式的に示したもの)と、図19(B)に示すオフバランス追加情報 (図15に示すオフバランス追加情報を圧縮して模式的に示したもの)と、から図20(A)に示すオフバランスB/S (図18に示すオフバランスB/Sを圧縮して模式的に示したもの)上の4期分の数値を演算するものであるが、詳しく述べる。

【0029】図5に示すように、オフバランスリース加味貸借対照表数値演算サブルーチンでは、まず、ステップ425において、オフバランスリース資産を演算する。このオフバランスリース資産の演算は、図15に示したオフバランス追加情報のオフバランスリース資産確定額O F G<sub>1</sub>に数値が入力されているか否かを判定し、肯定判定のとき (数値がヌルでないとき、以下同じ。) はその額 (4期分のオフバランスリース資産確定額O F G<sub>1</sub>) を図18に示すオフバランスB/S上のオフバランスリース資産101とする (本例の場合)。一方、否定判定のとき (数値がヌルのとき、以下同じ。) はオフバランス追加情報の支払リース料O F E<sub>1</sub> (販売費・一般管理費分) 及び支払リース料O F E<sub>2</sub> (製造原価分) が共に数値が入力されているか否かを判断し、肯定判定のときは、各4期間に支払リース料O F E<sub>1</sub>、O F E<sub>2</sub> (販売費・一般管理費分) 及び支払リース料O F E<sub>2</sub> (製造原価分) を合計した合計額T<sub>1</sub>を車両の法定耐用年数の5年に対応して5倍の額としたオフバランスリース資産推定額 ((O F E<sub>1</sub> + O F E<sub>2</sub>) × 5) をオフバランスB/S上のオフバランスリース資産101として演算し、否定判定のときは、図14に示したM/Cの貸借料・リース料MM5 (販売費・一般管理費分) 及びM/C6 (製造原価分) を合計した合計額T<sub>1</sub>を同様に5倍の額としたオフバランスリース資産推定額 ((MM5 + M/C6) × 5) をオフバランスB/S上のオフバランスリース資産101として演算と共に、オフバランスリース資産推定額に用いた方の合計額T<sub>1</sub>をRAMに記憶する。

【0030】次のステップ454では、オフバランスリース未払金及びオフバランス長期リース未払金を演算する。すなわち、オフバランスリース未払金の演算では、オフバランス追加情報のオフバランスリース未払金確定額O F H<sub>1</sub>の数値が入力されているか否かを判定し、肯定判定のときはオフバランスリース未払金確定額O F H<sub>1</sub>をオフバランスB/S上のオフバランスリース未払金

114とし（本例の場合）、否認判定のときは、ステップ452で演算したオフバランスリース資産101を0.2倍した推定額をオフバランスB/S上のオフバランスリース未払金114として演算する。また、オフバランス長期リース未払金の演算では、オフバランス追加情報のオフバランス長期リース未払金確定額OFH<sub>2</sub>の数値が入力されているか否かを判定し、肯定判定のときはオフバランス長期リース未払金確定額OFH<sub>2</sub>をオフバランスB/S上のオフバランス長期リース未払金124とし（本例の場合）、否認判定のときは、ステップ452で演算したオフバランスリース資産101を0.8倍した推定額をオフバランスB/S上のオフバランス長期リース未払金124として演算する。

【0031】次にステップ456では、オフバランスリース資産に係る減価償却実施額を演算する。このオフバランスリース資産に係る減価償却実施額の演算では、オフバランス追加情報のオフバランスリース資産に係る減価償却実施確定額OFJ<sub>1</sub>の数値が入力されているか否かを判定し、肯定判定のときはオフバランスリース資産に係る減価償却実施確定額OFJ<sub>1</sub>をオフバランスB/Sの脚注上のオフバランスリース資産に係る減価償却実施額131とし（本例の場合）、否認判定のときは、ステップ452でRAMに記憶した合計額TLを読み出して0.8倍した推定額（TL×0.8）をオフバランスB/Sの脚注上のオフバランスリース資産に係る減価償却実施額131として演算する。

【0032】また、ステップ456では、オフバランス追加情報の買掛金のうち割賦買掛金OFA<sub>1</sub>をオフバランスB/S上の流動負債の買掛金・工事未払金39のうち割賦買掛金111とし、オフバランス追加情報のその他の固定負債のうち长期割賦買掛金OFA<sub>2</sub>をオフバランスB/S上のその他の固定負債52のうち長期割賦買掛金121とし、オフバランス追加情報の買掛金のうちリース未払金OFB<sub>1</sub>をオフバランスB/S上の流動負債の買掛金・工事未払金39のうちリース未払金112とし、オフバランス追加情報のその他の固定負債のうち長期リース未払金OFB<sub>2</sub>をオフバランスB/S上のその他の固定負債52のうち长期リース未払金122とし、オフバランス追加情報のその他の流動負債のうち設備支払手形OFC<sub>1</sub>をオフバランスB/S上のその他の流動負債48のうち設備支払手形113とし、オフバランス追加情報のその他の固定負債のうち設備長期支払手形OFC<sub>2</sub>をオフバランスB/S上のその他の固定負債52のうち設備長期支払手形123とし、図18に示すオフバランスB/Sを作成し、オフバランスリース加味貸借対照表数値演算サブルーンして図4に示すステップ404へ進む。

【0033】なお、図18に示すオフバランスB/Sは、図12に示すB/Sに対して、固定資産にオフバランスリース資産101、流動負債にオフバランスリース

未払金114、固定負債にオフバランス長期リース未払金124がそれぞれ加えられた点（図20（A）も参照）、流動負債の買掛金・工事未払金39の内訳として割賦買掛金111及びリース未払金112、その他の流動負債48の内訳として設備支払手形113、その他の固定負債52の内訳として長期割賦買掛金121、長期リース未払金122及び設備長期支払手形123が加えられた点、並びに、脚注にオフバランスリース資産に係る減価償却実施額131が加えられた点で相違している。従って、図19（A）及び図20（A）に示すように、オフバランスB/S上の固定資産B<sub>2</sub>は、B/S上の固定資産B<sub>1</sub>にステップ452で演算したオフバランスリース資産101（図20（A）上のオフバランスリース資産OB）を加えると共に、オフバランスB/S上の流動負債D<sub>2</sub>は、B/S上の流動負債D<sub>1</sub>にステップ454で演算したオフバランスリース未払金114（図20（A）上のオフバランスリース未払金OD）を加え、オフバランスB/S上の固定負債E<sub>2</sub>は、B/S上の固定負債E<sub>1</sub>にステップ454で演算したオフバランス長期リース未払金124（図20（A）上のオフバランス長期リース未払金OE）を加えたものである。

【0034】次のステップ404では、ステップ403で作成したオフバランスB/Sと図16に示した財務追加情報からB/Sを修正した修正B/S上の数値を演算するための修正貸借対照表数値演算サブルーンが実行される。

【0035】ここで、図20及び図21を参照して、この修正貸借対照表数値演算サブルーンで実行される演算概念について説明する。上述したように、図20（A）は図18に示したオフバランスB/Sを圧縮して模式的に表したものであり、図20（B）は図16に示した財務追加情報を圧縮して模式的に表したものである。一方、図21（A）は、図20（A）に示した資産欄の流動資産A<sub>1</sub>を修正流動資産A<sub>2</sub>、固定資産性預金A<sub>3</sub>及び不健全流動資産A<sub>4</sub>に分類し（A<sub>1</sub> = A<sub>2</sub> + A<sub>3</sub> + A<sub>4</sub>）、固定資産B<sub>2</sub>を修正固定資産B<sub>3</sub>及び不健全固定資産B<sub>4</sub>に分類し（B<sub>2</sub> = B<sub>3</sub> + B<sub>4</sub>）、総継延資産C<sub>1</sub>を修正継延資産C<sub>2</sub>及び不健全継延資産C<sub>3</sub>に分類し（C<sub>1</sub> = C<sub>2</sub> + C<sub>3</sub>）、負債・資本欄の固定負債E<sub>2</sub>のうち代表者等からの借入金のうち自己資本相当額E<sub>3</sub>を頭在化すると共に、その他の剩余金のうち当期利益H<sub>1</sub>について、不健全資産計T<sub>1</sub>（=不健全流動資産A<sub>4</sub> + 不健全固定資産B<sub>4</sub> + 不健全継延資産C<sub>3</sub>）に見合う未実現損失H<sub>2</sub>（=T<sub>1</sub>）を頭在化させたものである（図26（A）も参照）。図21（B）は、図21（A）に示したB/Sから不健全資産計T<sub>1</sub>及び未実現損失H<sub>2</sub>を排除した修正B/Sである。この修正B/Sは、不健全資産計T<sub>1</sub>が排除されているので、図21（A）に示したB/Sに比べ信用格付対象企業の財務実体をより正確に表しているものと考えられる。修正貸借

40 40 50

対照表数値演算サブルーチンでは、オフバランスB/SとP/Lと財務追加情報とからこの修正B/S上の数値を演算するものである。

【0036】図6に示すように、この修正貸借対照表数値演算サブルーチンでは、まず、ステップ502において、固定資産性預金A<sub>t</sub>を固定資産性預金Aと固定資産性預金B<sub>t</sub>を加えることにより算出する。

【0037】固定資産性預金Aは下式(1)により演算される。すなわち、式(1)は、財務追加情報の固定資

$$\begin{aligned}
 & \text{固定資産性預金A} = \text{固定資産性預金A 確定額} V_t, (\text{固定資産性預金A 確定額}) \\
 & \text{A 確定額が未定のときは} = \text{固定資産性預金A 確定額} V_t, \cdots (1) \\
 & \text{ただし、固定資産性預金A 確定額} V_t = \min (\text{現金} \cdot \text{預金} 1, \\
 & \text{担保不足分} V_a) \\
 & \text{担保不足分} V_a = \max (0, \{\text{金融機関等借入相当額} V_b \\
 & - (\text{定期預金} 28 + \text{第三者提供による担保の} \\
 & \text{部分可能見込額} T_b)\}) \\
 & \text{金融機関等借入相当額} V_b = (\text{定期借入金} 40 + \text{社債} 49 \\
 & + \text{長期借入金} 60) - \text{代表者等借入のうち自己資} \\
 & \text{本相当額} T_b
 \end{aligned}$$

【0039】一方、固定資産性預金Bの算出では、固定資産性預金A控除後の現金・預金1(預金・現金1-固定資産性預金A)がオフバランス追加情報の滞納税金等確定額O/FD<sub>t</sub>より大きいか否かを判断し、肯定判断のときは、固定資産性預金B=滞納税金等確定額O/FD<sub>t</sub>とし、否定判断のときは、固定資産性預金B=固定資産性預金A控除後の現金・預金1(預金・現金1-固定資産性預金A)とする。すなわち、滞納税金等は、上述したように、極めて返済順位の高い負債とみることができたため、固定資産性預金A控除後の預金・現金1と相殺※

\* 産性預金A確定額V<sub>t</sub>、欄が入力されているときはその額となり、入力されていないときは、固定資産性預金A推定額V<sub>t</sub>が演算され、演算された数値がその額となる。なお、固定資産性預金A推定額V<sub>t</sub>は、演算された数値が現金・預金の額を越える場合には現金・預金の額とし、マイナスの場合は0として演算される。

【0038】

【数1】

※するものとして扱い、固定資産性預金A控除後の預金・現金1に相殺しきれない滞納税金等未相殺額f<sub>m</sub>が生じるときは、その滞納税金等未相殺額(滞納税金等確定額O/FD<sub>t</sub>-固定資産性預金B)を借入金に帯する負債として取り扱う。本例に則して付言すれば、下表1に示すように、固定資産性預金Bはe=d(dがcを超えるときはe=c)として算出され、dがcを超えるときは、滞納税金等未相殺額がf<sub>m</sub>=d-eとして算出される。

【0040】

【表1】

科目/期	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
現金・預金1	a	20,033	10,999	3,529
固定資産性預金A	b	0	0	0
固定資産性預金A 控除後の現金・預金 a-b	c = a-b	20,033	10,999	3,529
滞納税金等確定額 O/FD <sub>t</sub>	d	8,063	2,741	12,633
固定資産性預金B	e	8,063	2,741	3,529
滞納税金等未相殺 額(借入金に帯する 負債)	f <sub>m</sub> = d-e	0	0	9,104
				34,248

【0041】次にステップ504では、不健全流動資産A<sub>t</sub>が演算される。下表2に示すように、不健全流動資産A<sub>t</sub>は(1)~(14)までの合計値である。

【0042】

【表2】

(1) 調整後現金・預金架空計上額 Aa
(2) 調整後売上債権貸倒・架空計上額 Ab
(3) 調整後應計資産不良・架空計上額 Ac
(4) 調整後純合計額 Ad
(5) 調整後前渡金 Ae
(6) 調整後未収入金 Af
(7) 調整後前払費用 Ag
(8) 調整後仮払金 Ah
(9) 調整後預算貯金 Ai
(10) 調整後立替金 Aj
(11) 調整後不渡手形 Ak
(12) 調整後その他の流動資産 Al
(13) 差引有価証券合み損 Am
(14) 貸倒引当金(固定資産) 21
(15) 不健全流動資産 Aa
(16) 減価償却不足額定額 N
(17) 差引投資有価証券合み損 P
(18) 不動産合み損 Q
(19) 調整後長期貸付金 Ra
(20) 調整後保険積立金 Rr
(21) 調整後差入保証金 Rs
(22) 調整後不渡手形・固定化営業債権 At
(23) 調整後その他の投資 Au
(24) 貸倒引当金(固定資産) 36
(25) 不健全固定資産 B
(26) 不健全純流動資産 C
(27) 不健全資産計 T <sub>1</sub> (A <sub>a</sub> + B <sub>a</sub> + C <sub>a</sub> )

【0043】調整後現金・預金架空計上額 A<sub>a</sub> の演算では、財務追加情報に現金・預金架空計上確定額 L<sub>1</sub>、欄が入力されているときはその額となり、入力されていないときは、下式(2)により売上高PLIに対する回転期間の時系列変化に基づいて現金・預金架空計推定額が演算され、演算された数値が調整後現金・預金架空計上額 A<sub>a</sub> とされる。すなわち、この現金・預金架空計推定額 \*

$$(a) \frac{\text{当期現金} - \text{預金} \times 365}{\text{当期売上高}} \quad \text{前期現金} - \text{預金} \times 365 \geqq 30\text{日}$$

または

$$(b) \frac{\text{当期現金} - \text{預金} \times 365}{\text{当期売上高}} - \frac{2\text{期前現金} - \text{預金} \times 365}{2\text{期前売上高}} \geqq 30\text{日}$$

(a) ≥ (b) の場合

$$\text{現金・預金架空計推定額} =$$

$$\frac{\text{当期現金} - \text{預金} \times 365 - (\text{前期現金} - \text{預金} \times 365) + 30 \times \text{当期売上高}}{365}$$

(a) < (b) の場合

$$\text{現金・預金架空計推定額} =$$

$$\frac{\text{当期現金} - \text{預金} \times 365 - (\text{2期前現金} - \text{預金} \times 365) + 30 \times \text{当期売上高}}{365}$$

【0045】調整後売上債権貸倒・架空計上額 A<sub>b</sub> の演算では、財務追加情報に受取手形(含む割手・譲手)貸倒・架空計上確定額 L<sub>2</sub> 及び売掛金貸倒・架空計上確定額 L<sub>3</sub>、欄が入力されているときはそれらの額の合計となり、入力されていないときは、下式(3)により売上高PLIに対する回転期間の時系列変化に基づいて売上債権貸倒・架空計上推定額が演算され、演算された数値が調整後売上債権貸倒・架空計上額 A<sub>b</sub> とされる。すなわ

\* は、当期の回転期間が前期又は2期前に比べて30日以上伸びた場合は、架空計上があったものとして判断して、30日を超える日数に相当する額を不健全流動資産として演算する。

【0044】

【数2】

【0046】

【数3】

ち、この売上債権貸倒・架空計上推定額は、当期の回転期間が前期又は2期前に比べて10日以上伸びた場合は、架空計上があったものとして判断して、10日を超える日数に相当する額を不健全流動資産として演算する。

19	$(a) \frac{\text{当期売上債権} \times 365}{\text{当期売上高}} - \frac{\text{前期売上債権} \times 365}{\text{前期売上高}} \geq 10\text{日}$ または (b) $\frac{\text{当期売上債権} \times 365}{\text{当期売上高}} - \frac{2\text{期前売上債権} \times 365}{2\text{期前売上高}} \geq 10\text{日}$	(3)
(a) $\geq$ (b) の場合	$\text{売上債権における不健全資産} = \frac{\text{当期売上債権} \times 365 - (\text{前期売上債権回転期間} + 10) \times \text{当期売上高}}{365}$	
(a) $<$ (b) の場合	$\text{売上債権における不健全資産} = \frac{\text{当期売上債権} \times 365 - (\text{2期前売上債権回転期間} + 10) \times \text{当期売上高}}{365}$	

【0047】調整後棚卸資産不良・架空計上額A cの演算では、財務追加情報に棚卸資産不良・架空計上確定額し、欄が入力されているときはその額となり、入力されていないときは、下式(4)により売上高PLIに対する回転期間の時系列変化に基づいて調整後棚卸資産不良・架空計上推定額が演算され、演算された数値が調整後棚卸資産不良・架空計上額A cとされる。すなわち、この＊

(a) $\frac{\text{当期棚卸資産} \times 365}{\text{当期売上高}} - \frac{\text{前期棚卸資産} \times 365}{\text{前期売上高}} \geq 10\text{日}$ または (b) $\frac{\text{当期棚卸資産} \times 365}{\text{当期売上高}} - \frac{2\text{期前棚卸資産} \times 365}{2\text{期前売上高}} \geq 10\text{日}$	(4)
(a) $\geq$ (b) の場合	
(b) $<$ (a) の場合	

【0049】調整後総合調整額A dの演算では、財務追加情報に受取手形（含む割手・譲手）貸倒・架空計上確定額、売掛金貸倒・架空計上確定額及び棚卸不良・架空計上確定額のすべてが入力されているときは0（ゼロ）となり、いずれか又は全部が入力されていないときは、下式(5)により売上高PLIに対する回転期間の時系列変化に基づいて総合調整推定額が演算され、演算された数値が調整後総合調整額A dとされる。すなわち、この総合調整では、複数の勘定科目にわたり不健全資産が分割・計上されている場合や負債サイドの粉飾を想定して、総合回転期間（所要運転資金回転期間）の時系列変化に基づいて換金不能な不健全資産を算出するものである。ここで、所要運転資金は（受取手形+売掛金+割引

\* 棚卸資産不良・架空計上推定額は、当期の回転期間が前期又は2期前に比べて10日以上伸びた場合は、架空計上があったものとして判断して、10日を超える日数に相当する額を不健全流動資産として演算する。

【0048】

【数4】

30 手形+裏書譲渡手形+棚卸資産）から（支払手形+買掛金に計上されている割賦買掛金およびリース未払金を除く買掛金+裏書譲渡手形）を減算することにより求めることができる。総合調整推定額は、当期の総合回転期間が前期又は2期前に比べて10日以上伸びた場合は、架空計上があったものとして判断して、10日を超える日数に相当する額を不健全流動資産として演算する。このとき、当期の総合回転期間との乖離が大きい時の総合回転期間が基準回転期間とし、売上債権及び棚卸資産で不健全資産として計上した額は、重複計上となるので、控除される。

【0050】

【数5】

21	22
(a) $\frac{\text{当期所要運転資金} \times 365 - \text{前期所要運転資金} \times 365}{\text{当期売上高} - \text{前期売上高}} \geq 10$	
または	
(b) $\frac{\text{当期所要運転資金} \times 365 - 2 \text{期前所要運転資金} \times 365}{\text{当期売上高} - 2 \text{期前売上高}} \geq 10$	
(a) $\geq$ (b) の場合	(5)
総合調整における不健全資産 =	
$\frac{\text{当期所要運転資金} \times 365 - (\text{前期所要運転資金} \times 365 + \text{当期売上高} - \text{不健全売上損益} + \text{不健全償却資産})}{365}$	
(a) $<$ (b) の場合	
総合調整における不健全資産 =	
$\frac{\text{当期所要運転資金} \times 365 - (\text{2期前所要運転資金} \times 365 + 10 + \text{当期売上高} - \text{不健全売上損益} + \text{不健全償却資産})}{365}$	

【0051】調整後前渡金A<sub>e</sub>はオフバランスB/Sの前渡金1.2から財務追加情報の前渡金のうち換金可能額M<sub>e</sub>を減算することにより演算され、調整後未収入金A<sub>f</sub>はオフバランスB/Sの未収入金1.3から財務追加情報の未収入金のうち換金可能額M<sub>f</sub>を減算することにより演算され、調整後前払費用A<sub>g</sub>はオフバランスB/Sの前払費用1.4から財務追加情報の前払費用のうち換金可能額M<sub>g</sub>を減算することにより演算され、調整後仮払金A<sub>h</sub>はオフバランスB/Sの仮払金1.5から財務追加情報の仮払金のうち換金可能額M<sub>h</sub>を減算することにより演算され、調整後短期貸付金A<sub>i</sub>はオフバランスB/Sの短期貸付金1.6から財務追加情報の短期貸付金のうち換金可能額M<sub>i</sub>を減算することにより演算され、調整後長期貸付金A<sub>j</sub>はオフバランスB/Sの長期貸付金1.7から財務追加情報の立替金のうち換金可能額M<sub>j</sub>を減算することにより演算され、調整後不渡手形A<sub>k</sub>はオフバランスB/Sの不渡手形1.8から財務追加情報の不渡手形のうち換金可能額M<sub>k</sub>を減算することにより演算され、調整後その他の流動資産A<sub>l</sub>はオフバランスB/Sのその他1.9から財務追加情報のその他の流動資産のうち換金可能額M<sub>l</sub>を減算することにより演算される。差引有価証券含み損A<sub>m</sub>は、財務追加情報の有価証券含み損P<sub>m</sub>から有価証券含み益P<sub>m</sub>を減算した差引有価証券含み損P<sub>m</sub>と同様であり、貸倒引当金(流動資産)2.1はオフバランスB/Sの流動資産欄の貸倒引当金2.1と同じである。なお、これらの換金可能額(表2の(5)～(12))について財務追加情報に入力されていないときは未入力科目の全額が換金不能額(不健全流動資産)とみなされ、差引有価証券含み損A<sub>m</sub>がプラスであればその額が不健全流動資産とみなされる(差引有価証券含み損A<sub>m</sub>がマイナスの場合は評価されない)。

【0052】次に、図6のステップ506では、不健全固定資産B<sub>a</sub>が演算される。表2に示すように、不健全固定資産B<sub>a</sub>は(16)～(24)までの合計値であ

る。

【0053】減価償却不足確定額N<sub>a</sub>は財務追加情報の減価償却不足確定額N<sub>a</sub>と同じであり、差引投資有価証券含み損P<sub>a</sub>は財務追加情報の投資有価証券含み損P<sub>a</sub>から投資有価証券含み益P<sub>a</sub>を減算した差引投資有価証券含み損P<sub>a</sub>と同じであり、不動産含み損P<sub>a</sub>は財務追加情報の不動産含み損P<sub>a</sub>と同じであり、貸倒引当金(固定資産)3.6はオフバランスB/Sの固定資産欄の20貸倒引当金3.6と同じである。なお、差引投資有価証券含み損P<sub>a</sub>がプラスであればその額が不健全流動資産とみなされる(差引投資有価証券含み損P<sub>a</sub>がマイナスの場合は評価されない)。調整後長期貸付金A<sub>q</sub>はオフバランスB/Sの長期貸付金3.1から財務追加情報の長期貸付金のうち換金可能額Q<sub>a</sub>を減算することにより演算され、調整後保険積立金A<sub>r</sub>はB/Sの保険積立金3.2から財務追加情報の保険積立金のうち換金可能額Q<sub>a</sub>を減算することにより演算され、調整後差入保証金A<sub>s</sub>はオフバランスB/Sの差入保証金3.3から財務追加情報の差入保証金のうち換金可能額Q<sub>a</sub>を減算することにより演算され、調整後不渡手形、固定化営業債権A<sub>t</sub>はオフバランスB/Sの不渡手形、固定化営業債権3.4から財務追加情報の不渡手形、固定化営業債権のうち換金可能額Q<sub>a</sub>を減算することにより演算される。

【0054】なお、財務追加情報に減価償却不足確定額N<sub>a</sub>が入力されていないときは、下式(6)により減価償却不足額の推定額が演算され、演算された推定額が減価償却不足額となる。式(6)により演算された数値がマイナスのときは、減価償却不足額の推定額は0とされる。機械、装置等の推定耐用年数(5年)は、営業用車輛を考慮し、運送事業用、貸自動車業用又は自動車教習所用の車輛及び運搬具のうち自動車(大型乗用車)及び乗合自動車の耐用年数と同じとしたものである。

【0055】

【数6】

減価償却未足額 = 3期分の減価償却推定期額 - 3期分の減価償却実績額 … (6)  
 ただし、3期分減価償却推定期額は、減価償却資産(建物・機械及び構築・設備等)  
 の当期、前見及び2期前の合計額  
 減価償却推定期額+機械・設備等減価償却推定期額  
 総額-機械等減価償却推定期額=建物・機械等3期分合計額×0.9(残存割合)10  
 %／30(推定期間月数)  
 機械・設備等減価償却推定期額=機械・設備等3期分合計額×0.9(残存割合)10%  
 /9(推定期間年数)

【0056】調整後その他の投資Aの演算では、財務追加情報にその他の投資における不健全資産確定額R、額が入力されているときはその額となり、入力されていないときは、下式(7)により総資産に対する構成比の時系列変化に基づいてその他の投資における不健全資産推定額が演算され、演算された数値が調整後その他の投資\*

\* Aとされる。すなわち、当期の構成比が前期、2期前又は3期前に比べて増加した場合には、架空計上があったものとして判断して、その増加分に相当する額を不健全固定資産として演算する。

【0057】

【数7】

(a) $\frac{\text{当期その他の投資のうちその他} \times 100}{\text{当期総資産}} - \frac{\text{前期その他の投資のうちその他} \times 100}{\text{前期総資産}} > 0$
または
(b) $\frac{\text{当期その他の投資のうちその他} \times 100}{\text{当期総資産}} - \frac{\text{2期前の他の投資のうちその他} \times 100}{\text{2期前総資產}} > 0$
または
(c) $\frac{\text{当期その他の投資のうちその他} \times 100}{\text{当期総資産}} - \frac{\text{3期前の他の投資のうちその他} \times 100}{\text{3期前総資産}} > 0$
(a) $\geq$ (b) or (c) の場合 その他の投資のうちその他における不健全資産=当期その他の投資のうちその他-(前期その他の投資のうちその他の構成比×当期総資産) (a) < (b) or (c) の場合 その他の投資のうちその他における不健全資産=当期その他の投資のうちその他-(O期前までの他の投資のうちその他の構成比×当期総資産) ※ O期は2期前または3期前のときの方

【0058】図6のステップ508では、オフバランスB/Sの線延資産合計C<sub>1</sub>から線延資産のうち償金可能額S<sub>1</sub>を減算することにより不健全線延資産C<sub>2</sub>が演算され、次のステップ510では、ステップ504～508で演算した不健全流动資産A<sub>1</sub>、不健全固定資産B<sub>1</sub>及び不健全線延資産C<sub>2</sub>を加算することにより不健全資産合計T<sub>1</sub>が演算される。次にステップ512では、財務追加情報の代表者等借入のうち自己資本相当額T<sub>2</sub>を代表者等からの借入金のうち自己資本相当額E<sub>3</sub>として取得し、次のステップ514において、修正流动資産A<sub>2</sub>、修正固定資産B<sub>2</sub>及び修正継延資産C<sub>2</sub>を演算する。図20(A)及び図21(A)に示したように、修正流动資産A<sub>2</sub>はオフバランスB/Sの流动資産A<sub>1</sub>からステップ502、504で演算した固定資産性預金A<sub>3</sub>及び不健全流动資産A<sub>4</sub>を減算することにより、修正固定資産B<sub>2</sub>はオフバランスB/Sの固定資産B<sub>1</sub>から不健全固定資産B<sub>4</sub>を減算することにより、修正継延資産C<sub>2</sub>はオフバランスB/Sの継延資産C<sub>1</sub>から不健全継延資産C<sub>3</sub>を減算することによりそれぞれ求めることができる。

【0059】次のステップ516では、修正資本C<sub>2</sub>及び修正当期利益H<sub>2</sub>を演算して、修正貸借対照表数値演算サブルーチンを終了し(図26(B)も参照)、図4のステップ406に進む。図21(B)に示すように、修正資本C<sub>2</sub>は資本G<sub>1</sub>からステップ510で演算した

不健全資産計T<sub>1</sub>に等しい未実現損失H<sub>2</sub>を減算することにより求めることができ、修正当期利益H<sub>2</sub>はその他の剩余额のうち当期利益H<sub>1</sub>から未実現損失H<sub>2</sub>を減算することにより求めることができる。

【0060】次に、図4のステップ406では、図21(A)に示したB/Sについて財務追加情報により簿外を加味して修正した、会計処理外資産加味貸借対照表としての簿外加味B/S上の数値を演算するための簿外加味修正貸借対照表数値演算サブルーチンが実行される。

【0061】ここで、図21及び図22を参照して、この簿外加味修正貸借対照表数値演算サブルーチンで実行される算定概念について説明する。図22(A)に示す簿外加味B/Sの作成過程では、図21(A)に示した資産欄の固定資産性預金A<sub>3</sub>を固定資産の一部とみなして、みなし固定資産B<sub>5</sub>に組み入れると共に、財務追加情報の第三者提供による担保の処分可能見込額のうち預金・有価証券・本業に欠かせない現物出資相当額(T<sub>4</sub>+T<sub>5</sub>+T<sub>6</sub>)もみなし固定資産B<sub>5</sub>に組み入れるものである。また、負債・資本欄のみなし自己資本G<sub>3</sub>には資産欄に見合うように現物出資相当額(T<sub>4</sub>+T<sub>5</sub>+T<sub>6</sub>)が組み込まれている。更に、負債・資本欄には、代表者等に対する多額の役員報酬等調整額U<sub>2</sub>がプラス要素とし付加され、損失確定な簿外債務に係る未実現特別損失U<sub>3</sub>がマイナス要素として付加されている。なお、代表者等に対する多額の役員報酬等調整額U<sub>2</sub>は社外流

出分であることから、みなし自己資本  $G_1$  には含まれず、また、損失確定な簿外債務に係る未実現特別損失  $U_1$  も簿外であることから不健全資産  $T_1$  には含まれない。これらは、後述するように、総資本みなし当期利益率を演算するときに用いられる。図22(B)は、図22(A)の資産欄及び負債・資本欄からそれぞれ不健全資産  $T_1$ 、未実現損失  $H_2$  が排除されている。なお、修正流动資産  $A_2$ 、固定資産性預金  $A_3$ 、修正繰延資産  $C_2$ 、不健全資産  $T_1$ 、流动負債  $D_2$ 、代表者等からの借入金のうち自己資本相当額  $E_3$  及び未実現損失  $H_2$  は、修正貸借対照表数値演算サブルーチンで演算されネットワークサーバ112に格納されているので、簿外加味修正貸借対照表数値演算サブルーチンでは演算されない。

【0062】図7に示すように、この簿外加味修正貸借対照表数値演算サブルーチンでは、まず、ステップ532で財務追加情報の第三者提供による担保の処分可能見込額のうち預金(現物出資相当)  $T_4$ 、有価証券(現物出資相当)  $T_5$  及び本業に欠かせない不動産(現物出資相当)  $T_6$  を取得し、これらを加算して現物出資相当額  $(T_4 + T_5 + T_6)$  を求め、次のステップ534において、求めた現物出資相当額  $(T_4 + T_5 + T_6)$  にステップ502、514で演算した固定資産性預金  $A_3$  及び修正固定資産  $B_3$  を加算することによりみなし固定資産  $B_5$  を演算する  $(B_5 = B_3 + A_3 + T_4 + T_5 + T_6)$ 。

【0063】ステップ536では、修正固定負債  $E_4$ 、固定負債  $E_2$  から、代表者等からの借入金のうち自己資本相当額  $E_3$  を減算することにより演算し  $(E_4 = E_2 - E_3)$ 、次のステップ538において、ステップ516で演算した修正資本  $G_2$  に代表者等からの借入金のうちステップ512で演算した自己資本相当額  $E_3$  \*

$$\text{売上高経常利益率} = (\text{経常利益 PL12} / \text{売上高 PL1}) \times 100 \quad \dots (8)$$

【0067】次のステップ564では、オフバランス  $B/S$  及び  $P/L$  上の数値に基づいて下式(9)により総資本回転率  $b$  が演算される。総資本回転率  $b$  は、1年間に総資本の何倍の売上げを計上したかを示すもので、総資本をいかに効率的に活用させたかを示している。な

$$\begin{aligned} \text{総資本回転率} b &= \text{売上高 PL1} / \text{総資本二項平均} \quad \dots (9) \\ \text{ただし、総資本二項平均} &= (\text{流動負債 } D_2 + \text{固定負債 } E_2 + \text{特別法上} \\ &\quad \text{の準備金 } F_1 + \text{資本 } G_1)_{\text{平均}} + (\text{流動負債 } D_2 + \\ &\quad \text{固定負債 } E_2 + \text{特別法上} \text{の準備金 } F_1 + \text{資本 } G_1)_{\text{平均}} / 2 \\ &(\text{資本 } G_1 < 0 \text{ の場合は、資本 } G_1 = 0) \end{aligned}$$

【0069】次のステップ566では、オフバランス  $B/S$  上の数値に基づいて下式(10)により流动比率  $c$  が演算される。流动比率  $c$  は、当面の債務である流动負債に対してこれを賄うべき流动資産がどの程度保有されているかを示すもので、流动比率や資金繰り状況、支払能★

$$\text{流动比率} c = (\text{流动資産 } A_1 / \text{流动負債 } D_2) \times 100 \quad \dots (10)$$

【0071】次にステップ568では、オフバランス  $B/S$  上の数値に基づいて下式(11)により固定長期適

\* 及びステップ532で求めた現物出資相当額  $(T_4 + T_5 + T_6)$  を加算し、ステップ510で演算した不健全資産  $T_1$  に相当する未実現損失  $H_2$  を減算することにより、みなし自己資本  $G_1$  を演算する  $(G_1 = G_1 + E_3 + T_4 + T_5 + T_6 - H_2)$ 。次に、ステップ540において、財務追加情報の当該企業からの収入のうち多額と認められる金額計  $U_2$  を取得して代表者等に対する多額の役員報酬等調整額  $U_2$  とし、財務追加情報の損失確定な簿外債務  $U_1$  を取得して損失確定な簿外債務に係る未実現特別損失  $U_3$  として、簿外加味修正貸借対照表数値演算サブルーチンを終了し(図26(C)も参照)、図4のステップ408へ進む。

【0064】ステップ408では、 $B/S$ 、オフバランス  $B/S$ 、修正  $B/S$ 、簿外加味  $B/S$  及び  $P/L$  上及びそれらの演算過程での数値から信用格付対象企業の第1財務指標としての表面財務指標を演算する表面財務分析指標演算サブルーチンが実行される。なお、表面財務分析指標演算サブルーチンで演算する指標は、図23(A)に示すように、収益性、効率性、安全性、成長性及び企業規模等の多面的な評価に資するものである。

【0065】図8に示すように、この表面財務分析指標演算サブルーチンでは、ステップ562において、 $P/L$  上の数値に基づいて下式(8)により売上高経常利益率  $a$  が演算される。なお、売上高経常利益率  $a$  は売上高に対する経常利益の割合を示しており、経常利益を用いることで、企業本来の営業活動の効率とこれに関連して生じる財務活動を総合した経常的な活動が反映されるところから、平時における収益性を判断する上で適当と考えられる。

30 【0066】

【数8】

※お、売上不振、過大な借入れ、過大な設備投資、売掛金(未収回済)の未収、手形の乱発等は、総資本回転率  $b$  に直接影響を及ぼす。

【0068】

【数9】

【0069】

★力等をみるための基本的指標である。一般的に、望ましい基準は200%以上とされている。

【0070】

【数10】

合率dが演算される。固定長期適合率dは、固定資産が自己資本及び固定負債でどの程度賄われているかを示すもので、資金の調達と運用とのバランスが保たれているかをみるためのものである。一般的に、望ましい水準は100%以下とされている。固定資産に投下した資金は\*

$$\text{固定長期適合率}d = \frac{\text{固定資産}B_2}{(\text{資本}G_1 + \text{固定負債}E_2)} \times 100 \quad \dots (11)$$

\*返済期限のない自己資本で賄われることが望ましいが、例えば、運輸業では、現実的に外部負債に頼っている企業が多いことから、企業格付の上で判断要素となる。

【0072】

【数11】

【0073】次のステップ570では、B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(12)により経常収支比率eは、経常的な営業活動における収入合計と支出合計の割合を示すもので、資金繰りの良否をみることができる。100%以上であることを

$$\text{経常収支比率}e = \frac{\text{経常収入} - \text{経常支出}}{\text{経常収入}} \times 100 \quad \dots (12)$$

ただし、  
経常収入=売上高PL1+営業外収益PL6-(売上債権-販売原  
上債権)+(前受金44-前払費用44)+(未成工事  
受入金45-前期未成工事受入金45)+(前受収益46  
-前期前受収益46)-(未収入金13-前期未収入金  
13')  
経常支出=売上原価PL2+販売費-一般管理費PL4+営業外費  
用PL9-(買入債務-前払買入債務)-(未払金41-  
前期未払金41')-(未払現金42-前期未払現金42'  
)-(未払費用43-前期未払費用43')+(棚卸資産  
11-前期棚卸資産11')+(前渡金12-前期前渡金  
12')+(前払費用14-前期前払費用14')+(仮払金  
15-前期仮払金15')+(短期貸付金16-前期短期貸  
付金16')+(立替金17-前期立替金17')+(立替資  
産中の不渡手形18-前期流动資産中の不渡手形  
18')+(その他の流动資産19-前期その他の流动資  
産19')-減価償却実施額66-(全引当金-前期全  
引当金)-(その他の流动負債48-前期その他の流  
動負債48')

$$\text{売上債権} = \text{受取手形} 2 + \text{売掛金} 3 + \text{割引手形} 61 + \text{裏書譲渡手形} 62$$

$$\begin{aligned} \text{買入債務} &= \text{支払手形} 38 + \text{買掛金} 39 + \text{裏書譲渡手形} 62 \\ \text{全引当金} &= \text{貸倒引当金} (\text{流动資産}) 21 \text{の絶対値} + \text{貸倒引当金} (\text{固定資産}) 36 \text{の絶対値} + \text{賞与引当金} 47 + \text{退職給付引当金} 51 \end{aligned}$$

【0075】ステップ572及びステップ574では、信用格付対象企業の成長性を分析するために、それぞれP/L上の数値に基づいて売上高推移f及び当期利益額推移gが演算される。一般に、成長性分析では、売上高・当期利益額等を用いて、増減率でみる方法と増減実績でみる方法があるが、中小企業では売上高や当期利益が環境変化や特徴要因等により大きくブレることがあることから、増減率をでみる方法では、当期及び前期が減少であっても2前期が大幅な増加であれば、プラス評価となるなど、直近の決算の状況が色濃く反映されないという問題がある。このため、これら2指標では、4期分のP/L上の数値に基づいて、3期連続増加若しくは減★  
自己資本額h=資本G<sub>1</sub>

【0078】ステップ410では、B/S、オーバランB/S、修正B/S、簿外加味B/S及びP/L上の数値から、信用格付対象企業の第2財務指標としての実質財務指標を演算する実質財務分析指標演算サブルーチ

\*が原則であり、一度でも85%を切るようなことがある。  
れば資金繰り状態が注意を要する水準にあると考えられる。

【0074】

【数12】

$$\dots (12)$$

★少、2期連続増加若しくは減少、前期比増加若しくは減少、又は、増減なしのいずれかを選択する。

【0076】次にステップ576では、オーバランB/S上の数値に基づいて下式(13)により自己資本額hを演算して、表面財務分析指標演算サブルーチンを終了し、図4のステップ410へ進む。自己資本額hは、企業規模を計る上で、営業活動によって獲得された利益が保留されたものであること、返済期限がないこと等から、毎期の成績が反映され、ストックとして比較的安定した評価が可能である。

【0077】

【数13】

$$\dots (13)$$

ンが実行される。なお、実質財務分析指標演算サブルーチンで演算する指標は、図23(B)に示すように、健全性、収益性、返済能力、安全性及び企業規模等の多面的な評価に資するものである。

【0079】図9に示すように、この実質財務分析指標演算サブルーチンでは、ステップ602において、オフバランスB/S及び修正B/S上の数値に基づいて下式(14)により不健全資産比率Jが演算される。不健全資産比率Jは、オフバランスB/S上の総資産に対して\*

$$\text{不健全資産比率J} = \frac{\text{不健全資産計T}_1 / \text{総資産}}{100} \quad \dots (14)$$

ただし、

$$\text{不健全資産計T}_1 = \text{不健全流動資産A}_1 + \text{不健全固定資産B}_1$$

$$+ \text{不健全構成資産C}_3$$

$$\text{総資産T}_2 = \text{流動資産A}_2 + \text{固定資産B}_2$$

$$+ \text{総資産C}_1$$

【0081】次にステップ604では、オフバランスB/S、修正B/S、簿外加味B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(15)により総資本みなし当期利益率kが演算される。総資本みなし当期利益率kは、総資本に対するみなし当期利益の割合を示すもので、企業の実体に則した最終利益に基づく収益性を見るための指標として用いられる。例えば、画面に示す赤字であっても、不健全資産を内包せず、かつ、赤字をカバーするため

$$\text{総資本みなし当期利益率k} = \frac{\text{みなし当期利益H}_2 / \text{総資本二項平}}{100} \quad \dots (15)$$

ただし、みなし当期利益H2は当期利益PL21-不健全資産計T1+当該企業からの収入のうち多額と思われる金額計U1-損失確定な簿外債務U。

【0083】次のステップ606では、修正B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(16)により修正当期利益額Iが演算される。修正当期利益額Iは、当期利益から不健全資産を控除したもので、運輸業は車1台でも業を営むことができるため参入が比較的容易であり小規格

$$\text{修正当期利益額I} = \text{当期利益PL21} - \text{不健全資産計T}_1 \quad \dots (16)$$

【0085】次にステップ608では、オフバランスB/S、修正B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(17)により修正借入金等償還年数mが演算される。修正借入金等償還年数mは、営業活動により生じた資金流入額(キャッシュフロー)を実質ベースに引き直し、実際に返却すべき借入金を何年で償還できるかを見るもので、年数が短ければ高いほど高い評価となる。金融機関等借入相当額に短期借入金を含めている理由は、設備

$$\text{修正借入金等償還年数m} = \frac{\text{修正借入金/キャッシュフロー}}{\dots (17)}$$

ただし、

$$\text{修正借入金等+設備機器等借入相当額+借入金に準ずる負債額} \\ \text{キャッシュフロー} = (\text{当期利益PL21} - \text{不健全資産計T}_1) + (\text{減価償却実額額} 66 + \text{減価償却不足確定額N}_1 \text{+式(6)の減価償却不足額}) + \text{車輌に係る処分損+調整後オフバランスース資産に係る減価償却実施額(13-社外流出現金PL29+PL30)}$$

$$\text{金融機関等借入相当額} = (\text{短期借入金40+社債49+長期借入金50}) - \text{代表者等借入のうち自己資本相当額E,} \\ \text{借入金に準ずる負債額} = (\text{前期買掛金111+長期買掛金121+}} \\ \text{121)+(リース未払金112+長期リース未払金122)+(}} \\ \text{設備支払手形113+設備長期支払手形123)+(調整後オフバランスース未払金114+調整後オフバランスース未払金124)+\text{簿納税金等未相殺額}} \\ \text{簿納税金等未相殺額} = \text{簿納税金等確定額ORD}_1 - \text{固定資産性預金B}$$

\* 不健全資産がどの程度内包されているかを示すもので、企業の健全性を見るための指標となる。なお、この数値が大きいほど、資産内容が悪化している懸念がある。

$$【0080】$$

$$【数14】$$

$$不健全資産計T_1 = (不健全資産計T_1 / 総資産) \times 100 \quad \dots (14)$$

※けの代表者等に対する当該企業からの収入のうち多額と認められる額があれば、みなし当期利益はプラスとなり、逆に、表面的には黒字であっても、多額の不健全資産を内包している場合にはみなし当期利益はマイナスとなり、低い評価となる場合がある。

$$【0082】$$

$$【数15】$$

$$\text{総資本みなし当期利益率H}_2 = \frac{\text{みなし当期利益PL21}}{\text{総資本二項平}} \quad \dots (15)$$

$$\text{ただし、みなし当期利益H}_2 = \text{当期利益PL21} - \text{不健全資産計T}_1 + \text{当該企業からの収入のうち多額と思われる金額計U}_1 - \text{損失確定な簿外債務U。}$$

$$\text{確定な簿外債務U。} \quad \dots (15)$$

★ 模(零細)企業も多いことから、比率による分析により実数による分析の方が好ましいと考えられる。

$$【0084】$$

$$【数16】$$

$$\text{修正当期利益額I} = \text{当期利益PL21} - \text{不健全資産計T}_1 + \text{当該企業からの収入のうち多額と思われる金額計U}_1 - \text{損失確定な簿外債務U。} \quad \dots (16)$$

$$\text{ただし、} \quad \dots (16)$$

★ 資金にも拘わらず短期借入金で資金調達をする場合があるための理由は、主要設備である車輌の減価償却耐用年数が3~5年であること、車輌に係る設備投資がある程度一定したサイクルで行われていること、事故等により処分しなければならないケースがあること等による。

$$【0086】$$

$$【数17】$$

$$\text{修正借入金等償還年数m} = \frac{\text{修正借入金/キャッシュフロー}}{\dots (17)}$$

【0087】次のステップ610では、オフバランスB/S及び簿外加味B/S上の数値に基づいて下式(1)によりみなし自己資本比率nが演算される。みなし自己資本比率nは、総資本に対してみなし自己資本がど\*

\*の程度占めているかを示すもので、企業の実体に則した資本蓄積の度合いをみるための指標である。

【0088】

【数18】

$$\text{みなし自己資本比率} n = \frac{\text{みなし自己資本} G_n}{\text{総資本} T_n} \quad \dots (18)$$

ただし、みなし自己資本  $G_n = \text{自己資本} G_1 - \text{不健全資産計} T_1 + \text{代表者等借入のうち自己資本相当額} E_3 + \text{第三者提供担保のうち現物出資相当額} (T_4 + T_5 + T_6)$

【0089】次のステップ612では、オフバランスB/S及び修正B/S上の数値に基づいて下式(19)により修正流动比率pが演算される。修正流动比率pは、当面の債務である流动負債に対してこれを賄うべき実質的な資産価値を持つ流动資産がどの程度保有されている※

10※を示すもので、企業の実体に則した流动性や資金繫り状況、支払能力等をみるための指標である。

【0090】

【数19】

$$\text{修正流动比率} p = \frac{\text{修正流动資産} A_2}{\text{流动負債} D_2} \quad \dots (19)$$

ただし、修正流动資産  $A_2 = \text{流动資産} A_1 - \text{固定資産予積} A_3 - \text{不健全流动資産} A_4$

【0091】次にステップ614では、B/S、修正B/S及びP/L上の数値に基づいて不健全資産が対前期比で増加している場合には下式(20-2)により、不健全資産が対前期比で減少している場合には下式(20-3)により、増減がない場合には下式(20-1)により、修正経常収支比率qが演算される。修正経常収支比率qは、表面的な経常収支比率に不健全資産の対前期比増減を加味したもので、実質的な資金繫りの良否をみ★

★ための指標である。なお、表面財務分析の経常収支比率eが100%を超えていても、当該指標が100%を割り込んでいるときは注意が必要となり、一度でも85%を切るようであれば資金繫り状況は警戒水準にあると考えられる。

【0092】

【数20】

$$\text{修正経常収支比率} q = \frac{\text{経常収入} / \text{修正経常支出}}{\text{経常収入} / \text{修正経常支出} + \text{不健全資産}} \quad \dots (20-1)$$

$$\text{修正経常収支比率} q = \frac{(\text{経常収入} / \text{修正経常支出} + \text{不健全資産}) \times 100}{\text{対前期比増加額}} \quad \dots (20-2)$$

$$\text{修正経常収支比率} q = \frac{(\text{経常収入} / \text{修正経常支出}) \times 100}{\text{不健全資産対前期比増加額}} \quad \dots (20-3)$$

ただし、  
 $\text{修正時経常支出} = \text{経常支出} + \text{各貸倒引当金} \times \text{対前期比増加額}$   
 $= (\text{貸倒引当金} 21 \times \text{絶対値} + \text{貸倒引当金} 36 \times \text{絶対値})$   
 $= (\text{貸倒引当金} 21 \times \text{絶対値} - \text{貸倒引当金} 36 \times \text{絶対値})$

$$\text{不健全資産対前期比増加額} = \text{当期不健全資産計} T_1 + \text{前期不健全資産計} T_1$$

【0093】次にステップ616では、簿外加味B/S上の数値に基づいて下式(21)によりみなし自己資本額rを演算して実質財務分析指標演算サブルーチンを終了し図4のステップ412へ進む。みなし自己資本額rは、自己資本から不健全資産を控除して、代表者等借入☆みなし自己資本額r=みなし自己資本G<sub>n</sub>

☆のうち自己資本相当額及び第三者提供担保のうち現物出資相当額を加えたもので、実質的な自己資本とみることができる。

【0094】

【数21】

… (21)

【0095】ステップ412では、オフバランスB/S、修正B/S、簿外加味B/S及びP/L上の数値から、B/SやP/L上の実体からの乖離、換言すれば、粉飾度合いを測る、第3財務指標としての粉飾等調整指標を演算する粉飾等調整指標演算サブルーチンが実行される。なお、粉飾等調整分析指標演算サブルーチンで演算する指標は、図23(C)に示すように、健全性、特

に、財務諸表の数値と実質的な財務諸表の数値との乖離の程度を多面的に評価するものである。

【0096】図10に示すように、この粉飾等調整指標演算サブルーチンでは、ステップ632においてオフバランスB/S及び修正B/S上の数値に基づいて下式(22)により流动比率乖離幅sが演算され、次のステップ634でB/S、修正B/S及びP/L上の数値に

基づいて下式(23)により経常収支比率乖離幅tが演算される。両指標は、不良・架空資産を計上しやすい勘定科目に基づいて算出されるものであり、短期返済能力をみるためのものである。表面と実質との差異が大きい\*

$$\text{流動比率乖離幅} = \text{流動比率} - \text{修正流動比率} \quad \cdots (22)$$

【0098】

$$\begin{aligned} \text{経常収支比率乖離幅} &= \text{経常収支比率} - \\ &\quad - \text{修正経常収支比率} \quad \cdots (23) \end{aligned}$$

【0099】次にステップ636では、オフバランスB/S、修正B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(24)により修正後売上高借入金等倍率uが演算される。修正後売上高借入金等倍率uは、金融機関等借入金相当額及び借入金に準ずる負債額が売上高の何倍あるかをみるための指標である。一般的に、企業が正常な営業活動

\* 程粉飾の可能性が高まり、資金繰り状況、延いては企業の将来性に懸念があると考えられる。

【0097】

【数22】

$$\text{流動比率乖離幅} = \text{流動比率} - \text{修正流動比率} \quad \cdots (22)$$

※ ※ 【数23】

… (22)

$$\begin{aligned} \text{経常収支比率乖離幅} &= \text{経常収支比率} - \\ &\quad - \text{修正経常収支比率} \quad \cdots (23) \end{aligned}$$

… (23)

【0100】次にステップ636では、オフバランスB/S、修正B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(25)により売上高減価償却不足額比率vを演算し、粉飾等調整指標演算サブルーチンを終了して図4のステップ414へ進む。売上高減価償却不足額比率vは、売上高に対する減価償却不足額の割合を示すもので、当該指標の数値が大きい程、粉飾の可能性は高く、かつ、資産内容の実体は悪化している懸念がある。通常、減価償却額は一定の金額を限度として損金に算入できることから、企業が正常な営業活動

10★活動をしている限り、当該指標が1.2倍以上となる可能性は低く、1.2倍以上となる原因としては、売上不振、過大な設備投資、用途不明金への流用、多額の不全資産の内包、税金の滞納等が考えられる。

【0100】

【数24】

$$\begin{aligned} \text{修正後売上高借入金等倍率} &= \text{売上高借入金等倍率} - \\ &\quad - \text{売上高現預金倍率} \quad \cdots (24) \end{aligned}$$

ただし、

$$\begin{aligned} \text{売上高借入金等倍率} &= \text{修正借入金等} / \text{売上高 PLI} \\ \text{売上高現預金倍率} &= (\text{現金} - \text{預金} - \text{固定資産性預金}) / \text{売上高 PLI} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{修正借入金等} &= \text{金融機関等借入相当額} + \text{借入金に準ずる} \\ &\quad \text{負債額} \end{aligned}$$

【0101】次のステップ638では、修正B/S及びP/L上の数値に基づいて下式(25)により売上高減価償却不足額比率vを演算し、粉飾等調整指標演算サブルーチンを終了して図4のステップ414へ進む。売上高減価償却不足額比率vは、売上高に対する減価償却不足額の割合を示すもので、当該指標の数値が大きい程、粉飾の可能性は高く、かつ、資産内容の実体は悪化している懸念がある。通常、減価償却額は一定の金額を限度として損金に算入できることから、企業が正常な営業活動

☆動をしている限り、当該指標は0.0%となるはずで、当該指標がプラスの数値となる場合は、どうしても黒字決算を組まなければならない事情があるはずである。なお、当該指標が2.0%以上の企業は、粉飾決算による健全性の欠如や資金繰りショート等の懸念があるものと考えられる。

【0102】

【数25】

$$\begin{aligned} \text{売上高減価償却不足額比率} &= (\text{減価償却不足額} / \text{売上高 PLI}) \times 100 \quad \cdots (25) \end{aligned}$$

【0103】図4のステップ414では、表面財務分析指標演算サブルーチン、実質財務分析指標演算サブルーチン及び粉飾等調整指標演算サブルーチンで演算した表面財務分析指標、実質財務分析指標及び粉飾等調整指標を評点し、格付する評点・格付処理サブルーチンが実行される。ここで、図23を参照して、評点・格付処理サブルーチンでの評点概念について簡単に説明すれば、図23(A)に示すように、表面財務分析指標の各指標はそれぞれ5~0の評点がなされ、図23(B)に示すように、実質財務分析指標の各指標はそれぞれ10~0又は5~0のプラス評点がなれる。これに対し、図23(C)に示すように、粉飾等調整指標の各指標は、財務諸表の実体財務からの乖離や財務体質の脆弱性を測るも

のため、0~10のマイナス評点がなされる。

【0104】図11に示すように、この評点・格付処理サブルーチンでは、ステップ652において、データベースサーバ113に格納されている、第1評点基準、第2評点基準としての評点テーブルを読み出し(下表3は運輸業の評点テーブルの例である。)、次のステップ654において、表面財務分析指標、実質財務分析指標及び粉飾等調整指標の各指標のポイント化(評点)が行われ、ステップ656で評点された各指標のポイントの得点を加算(及び減算)する演算が実行される(図23(D)参照)。

【0105】

【表3】

【0106】次のステップ658では、ステップ310でデータベースサーバ113に格納した債務情報を読み出し、ステップ670において、データベースサーバ113に格納されている債務情報を得点テーブルを読み出しへ得点(図17に示す各トリックスの括弧の前に記載された数値)を取得する。次にステップ672において、ステップ656で演算した財務分析の得点がステップ670で演算(取得)した債務情報を得点より大きいか否かを判断し、肯定判断されたときは、次のステップ74において、信用格付を行つための区分対象得点を債務情報を得点とし、否定判断されたときは、ステップ676において、区分対象得点を財務分析得点としてステップ678へ進む。すなわち、ステップ672～676では、区分対象得点を財務分析得点及び債務情報を得点のいづれか大きいとする処理がなされる。これは、対象

20 業の財務体質が良好でも支払に延滞が発生するような場合を考慮したものである。

【0107】次にステップ6 7 8では、下表4に示すように、企業の信用の程度を複数に区分した格付ランクマープルをデータベースサーバー1 1 3から読み出して、次のステップ6 8 0において、区分対象得点がいずれの信用区分に属するかを判定することにより企業の信用格付けを行って、次のステップ6 8 2で、図2 4、図2 5及び図2 6に示すように、信用格付及び財務諸表に関する帳票のイメージをPDF (Public Domain Software)化してデータベースサーバー1 1 3に格納して、評点・格付処理サブルーチンを終了し図2の格付処理サブルーチン及び格付ルーチンを終了する。

[010]

【表4】

序号	債務者区分イメージ	主義	得点
A	正直先	財務内容および資金繰りとも良好であり、現時点において最も信頼性が高い。	100~70
B	正直先	財務内容および資金繰りとも良好であり、現時点において最も信頼性が高い。	~50
C1	従業者先	財務内容および資金繰りとも良好に近いが、信頼性においてやや劣る。	~45
C2		財務内容は上位者等に劣るもの。特段な従業者により債務履行の信頼性に注目を要する。	~40
C3		財務内容および資金繰りとも上位者等に劣り、安心感に欠けている。	~35
C4		財務内容および資金繰りとも上位者等に劣り、不安感に欠けている。	~30
D1	従業者先	財務内容および資金繰りとも信頼性が認められるが、債務履行の信頼性に小さな懸念を抱くとともに、今後の発展について注目を要する。	~25
D2		財務内容が監視対象であり、債務履行の信頼性が低い。	~20
D3		財務内容が監視対象であり、債務履行の信頼性が極めて低い。	~15
E*	実質破綻先	財務内容が破綻状態にあり、債務履行に疑問を抱いている。	~8
F*	破綻先	財務内容が監視対象であり、債務履行に疑問を抱いている。	~8

【0109】図2のステップ208では、コンピュータ端末102からダウンロードの要求か否かを判断し、肯定判断のときは、ステップ218において、ステップ682でデータベースサーバ113に格納した信用格付及び財務諸表に関する帳票のイメージを要求先に送信することによりダウンロード処理を実行して信用格付ルーチンを終了する。なお、コンピュータ端末102から対象企業を特定するには、自己(信用金庫)の店番号及び対象企業の口座番号(顧客番号)を入力すればよい。

【0110】一方、ステップ208で否定判断されたときは、ステップ210において、ステップ212又は214で既に受信したデータの修正か否かを判断し、肯定判断のときは、ステップ220において、データの追加・修正を許容し、修正されたデータをデータベースサーバ113に格納して信用格付ルーチンを終了し、否定判断のときは、ステップ222において、例えばデータベースサーバ113のホームページ参照等に対応するための別処理を実行して信用格付ルーチンを終了する。

【0111】以上のように、B/S上の数値とオフバランス追加情報に基づいてオフバランス資産を加味したオフバランスB/S上の数値を演算し(ステップ403)、オフバランスB/S上の数値と財務追加情報に基づいてオフバランスB/Sの健全全流動資産、健全固定資産及び健全全継続資産を排除した修正B/S上の数値を演算し(ステップ404)、修正B/S上の数値と財務追加情報に基づいてオフバランス資産の外に会計処理が簿外となっている簿外資産を加味した簿外加味B/S上の数値を演算するようにした(ステップ40

6) ので、オフバランスB/S、修正B/S及び簿外加味B/Sには会計処理が簿外となっているオフバランス資産が反映され、修正B/S及び簿外加味B/Sでは健全資産が排除され、簿外加味B/Sには更にオフバランス資産の簿外資産が反映されることから、B/S及びP/L等の財務情報のみを割り当てる場合よりも信用格付対象企業の財務情報を実体に則して把握することができると共に、これらのB/S、オフバランスB/S、修正B/S、簿外加味B/S及びP/L上の数値に基づいて信用格付対象企業の表面財務分析、実質財務分析及び粉飾等調整上の指標を演算し(ステップ408～ステップ412)、表3に示した評点テーブルにより表面財務分析、実質財務分析及び粉飾等調整上の指標を評点して加算し、表4に示した信用格付区分で信用格付対象企業の信用格付を行うようにした(ステップ414)ので、信用格付対象企業の実体に沿った精度の高い信用格付を行なうことができる。更に、本実施形態では、区分対象得点を財務分析得点及び債務情報得点のいずれか小さい方として(ステップ672～676)ので、信用格付対象企業の支払状況等についての形式的側面からの情報も加味して信用格付を行うことが可能である。

【0112】なお、本実施形態ではネットワーク上での信用格付システムについて説明したが、上述した信用格付のプログラムをCD-ROM等の記録媒体に記録し、当該プログラムをコンピュータにインストールした信用格付装置に本発明を適用するようにして貰てもよい。また、本実施形態では、表面財務分析指標、実質財務分析指標及び粉飾等調整指標を演算した後、評点するようにした

が、各指標を演算した後に各指標毎に評点するようにしてもよく、修正B/S、簿外加味B/Sを格付処理が終了した後作成するようにしたが（ステップ682）、表面財務分析指標、実質財務分析指標及び粉飾等調整指標を演算する前後に作成するようにしてもよい。更に、本実施形態では、ネットワークサーバ112に格付処理サブルーチンを実行させる例を示したが、ネットワークサーバ112の負荷を軽減するために、格付処理用のコンピュータに格付処理を実行せざるにしてもよい。また、本実施形態では、債務情報を略号化して企業信用格付サイト110に送信する例を示したが、信用金庫側が債務情報とその情報を評点する評点表を有しており、債務情報として評点表に記載された評点を送信するようにしてもよく、ネットワークでの安全性を確保するために略号化して送信するにしてもよい。

【0113】更に、本実施形態では、支払リース料を把握するためにM/Cを財務諸表として信用金庫のコンピュータ端末から企業信用格付サイトに送信する例を示したが、信用格付を行う上で財務諸表としてM/Cは必要ではなく、オフバランス追加情報や他の財務諸表から推定することが可能である。また、本実施形態では、財務追加情報により簿外加味修正した簿外加味B/S上の数値を演算し、減点要素として粉飾等調整指標を用いた例を示したが、簿外加味B/Sを作成せず、及び／又は、粉飾等調整指標がなくても信用格付対象企業に対して適正な信用格付を行うことができる。簿外加味B/Sを作成し、かつ、粉飾等調整指標を演算することで、一層精度の高い信用格付を行うことができる。更に、本実施形態では、多数の表面財務指標、実質財務指標、粉飾等調整指標を例示したが、信用格付にはこれらの指標の全てが必要なわけではなく、適宜適直を選択するようにしてもよい。この場合には、表3及び表4に示した評点テーブル等を信用格付対象企業の実体に応じて変更すればよい。そして、本発明は上述した実施形態に制限されることなく、特許請求の範囲を逸脱することなく種々の態様を探ることができる。

## 【0114】

【発明の効果】以上説明したように、本発明によれば、オフバランスリース資産を加味したオフバランス貸借対照表上の数値を演算し、オフバランス貸借対照表から修正貸借対照表上の数値を演算するので、オフバランスリース資産を多く内在する業種に属する企業について、貸借対照表及び損益計算書等の財務情報をのみを基礎とする場合より実体に則した財務情報を得ることができると共に、貸借対照表、修正貸借対照表及び損益計算書上の数値に基づいて、企業の表面的財務体質を多面的に表す第1財務指標及び実質的財務体質を多面的に表す第2財務指標を演算して信用格付を行うので、表面的財務体質を表す第1財務指標のみで企業の信用格付を行う場合よりも、企業の実体を反映した信用格付を行うことができる。

る、という効果を得ることができる。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明が適用可能な実施形態の信用格付システムの概略構成図である。

【図3】信用格付ルーチンのステップ214の詳細を示すファイル情報取込処理サブルーチンのフローチャートである。

【図4】信用格付ルーチンのステップ216の詳細を示す格付処理サブルーチンのフローチャートである。

【図5】格付処理サブルーチンのステップ403の詳細を示すオフバランスリース加味貸借対照表数値演算サブルーチンのフローチャートである。

【図6】格付処理サブルーチンのステップ404の詳細を示す修正貸借対照表数値演算サブルーチンのフローチャートである。

【図7】格付処理サブルーチンのステップ406の詳細を示す簿外加味修正貸借対照表数値演算サブルーチンのフローチャートである。

【図8】格付処理サブルーチンのステップ408の詳細を示す表面財務分析指標演算サブルーチンのフローチャートである。

【図9】格付処理サブルーチンのステップ410の詳細を示す実質財務分析指標演算サブルーチンのフローチャートである。

【図10】格付処理サブルーチンのステップ412の詳細を示す粉飾等調整指標演算サブルーチンのフローチャートである。

【図11】格付処理サブルーチンのステップ414の詳細を示す評点・格付処理サブルーチンのフローチャートである。

【図12】コンピュータ端末から企業信用格付サイトへ送信される貸借対照表のデータを示す説明図である。

【図13】コンピュータ端末から企業信用格付サイトへ送信される損益計算書のデータを示す説明図である。

【図14】コンピュータ端末から企業信用格付サイトへ送信される販売費・一般管理費明細および製造原価明細のデータを示す説明図である。

【図15】コンピュータ端末から企業信用格付サイトへ送信されるオフバランス追加情報のデータを示す説明図である。

【図16】コンピュータ端末から企業信用格付サイトへ送信される財務追加情報のデータを示す説明図である。

【図17】コンピュータ端末から企業信用格付サイトへ送信される債務情報の概念を説明するための説明図である。

【図18】企業信用格付サイトで演算されたオフバランス貸借対照表を示す説明図である。

【図 19】(A)は貸借対照表を模式的に示す説明図であり、(B)はオーバランス追加情報を模式的に示す説明図である。

【図 20】(A)はオーバランス貸借対照表を模式的に示す説明図であり、(B)は財務追加情報を模式的に示す説明図である。

【図 21】(A)は修正貸借対照表の作成過程を模式的に示す説明図であり、(B)は修正貸借対照表を模式的に示す説明図である。

【図 22】(A)は簿外加味貸借対照表の作成過程を模式的に示す説明図であり、(B)は簿外加味修正貸借対照表を模式的に示す説明図である。

【図 23】(A)は表面財務分析指標と評点との関係を模式的に示す説明図であり、(B)は実質財務分析指標と評点との関係を模式化した模式的に示す説明図であり、(C)は粉飾等調整指標と評点との関係を模式的に示す説明図であり、(D)はこれら(A)～(C)の評点を加算した財務分析得点合計の説明図である。

【図 24】(A)は表面財務分析指標、実質財務分析指標及び粉飾等調整指標の PDF イメージを示したもので\*20

\*あり、(B)は表面財務分析指標、実質財務分析指標及び粉飾等調整指標の評点後の PDF イメージを示したものである。

【図 25】(A)は貸借対照表の PDF イメージを示したものであり、(B)はオーバランス貸借対照表の PDF イメージを示したものである。

【図 26】(A)は修正貸借対照表の作成過程で演算される健全資産の PDF イメージを示したものであり、(B)は修正貸借対照表の PDF イメージを示したものであり、(C)は簿外加味修正貸借対照表の PDF イメージを示したものである。

#### 【符号の説明】

101 ネットワーク

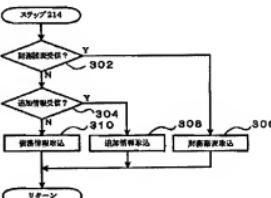
102、103 コンピュータ端末

110 企業用格付サイト

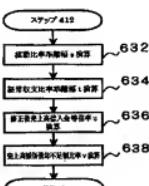
111 ネットワークサーバ  
112 ネットワーク端末  
113 ネットワークサーバ  
114 LAN

101 ネットワーク  
102、103 コンピュータ端末  
110 企業用格付サイト  
111 ネットワークサーバ  
112 ネットワーク端末  
113 ネットワークサーバ  
114 LAN

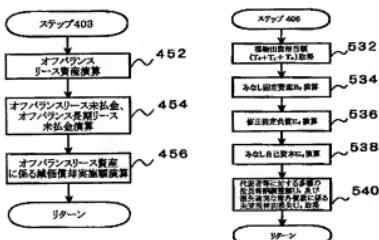
【図 3】



【図 10】



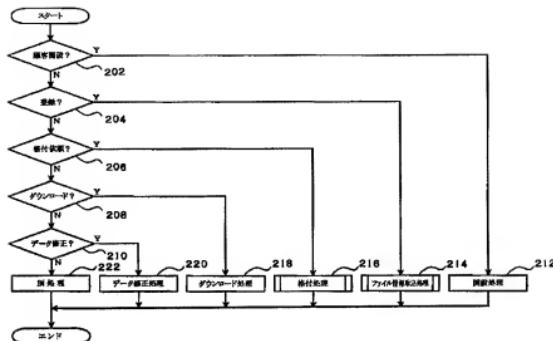
【図 5】



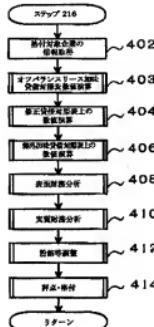
【図 7】



【図2】



【図4】



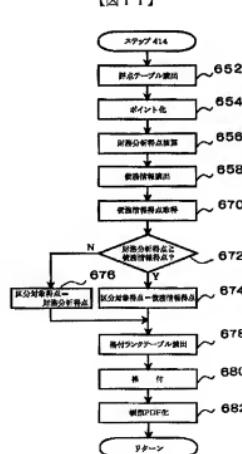
【図6】



[图 8]



【図9】



【图12】

【図13】

項目	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
売上高 PL1	681,485	679,061	556,588	581,910
売上原価 PL2	405,244	435,756	455,002	522,350
売上総利益 PL3	176,241	103,304	60,586	58,180
販売費・一般管理費 PL4	138,867	177,451	75,440	69,304
販売費	52,714	18,653	5,939	10,144
販売外取引 PL5	8,913	6,261	6,414	12,153
販売利潤・配当金 PL7	194	22	12	3
その他の PL8	3,721	8,180	8,462	12,120
販賣外費用 PL9	8,657	9,190	8,766	7,168
支払利息・配当金 PL10	8,577	9,180	8,679	9,942
その他の PL11	78	11	26	230
販売利益 PL12	32,634	12,664	4,413	45,169
販賣外費用 PL13	0	0	15,941	0
販賣外費用 PL14	0	0	0	0
その他の PL15	0	0	15,941	0
特別損失 PL16	3,331	0	30,102	0
固定資本勘定 PL17	3,331	0	1,990	0
その他の PL18	0	0	18,112	0
販売販当益 PL19	29,300	12,664	854	45,169
販売販当益 PL20	75	20	0	0
販賣外費用 PL21	28,750	18,784	654	45,169
販賣外費用 PL22	▲166,726	▲151,993	▲144,295	▲144,058
販賣外費用 PL23	0	0	0	0
中間配当金 PL24	0	0	0	0
中間配当準備金 PL25	0	0	0	0
当期末未処理益 PL26	▲157,520	▲144,706	▲144,659	▲140,244
販賣外費用 PL27	0	0	0	0
販賣外費用 PL28	0	0	0	0
販賣外費用 PL29	0	0	0	0
販賣外費用 PL30	0	0	0	0
販賣外費用 PL31	0	0	0	0
当期末総益 PL32	▲157,520	▲144,706	▲144,656	▲140,244

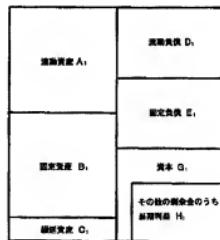
(単位:千円, A, %)		
販賣外費用の販賣員費	67	65
販賣外費用の販賣員費	71	71
販賣外費用の販賣員費	0.00	0.00
販賣外費用の販賣員費	0.00	0.00
販賣外費用の販賣員費	0	0

【図14】

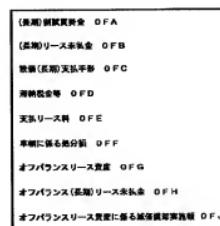
項目	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
販売手数料 MM1	0	0	0	0
販造販賣 MM2	29	0	63	308
販造販賣 MM3	0	0	0	0
人件費 MM4	67,359	85,987	45,361	39,591
人件費・リース料 MM5	15,312	55,112	5,432	2,617
人件費・公務費 MM6	7,390	8,444	1,929	787
販賣外費用 MM7	63	0	0	2,707
販賣外費用 MM8	2,655	4,007	4,599	6,963
その他の MM9	46,078	45,901	20,177	16,383
合計	138,867	177,451	75,440	69,304
材料費 MC1	21,251	18,023	35,459	39,048
人件費 MC2	253,557	266,814	243,790	265,576
販賣外費用 MC3	210,437	153,920	178,754	228,126
外注加工費 MC4	90,091	77,885	24,043	27,345
原価	0	0	2,017	8,697
機械動力費 MC5	0	0	0	0
販賣外費用・リース料 MC6	46,056	19,976	70,596	78,353
明細人件費 MC7	0	0	3,072	3,314
販賣外費用 MC8	0	0	0	86,628
その他の MC9	72,280	55,655	76,025	83,789
合計	485,244	435,765	455,002	552,750
当期末商品仕入高	0	0	0	0

【図19】

(A)



(B)



【図15】

(単位:千円)

科目/用	1997/08	1998/08	1999/08	2000/08
買掛金のうち割賦買掛金 OFA, (借入金に準ずる負債)	0	0	0	0
その他の固定負債のうち長期割賦買掛金 OFA <sub>2</sub> , (借入金に準ずる負債)	0	0	0	0
買掛金のうちリース未払金 OFB <sub>1</sub> , (借入金に準ずる負債)	0	0	0	0
その他の固定負債のうち長期リース未払金 OFB <sub>2</sub> , (借入金に準ずる負債)	0	0	0	0
その他の流動負債のうち設備支払手形 OFC <sub>1</sub> , (借入金に準ずる負債)	0	1,746	13,065	22,297
その他の固定負債のうち設備長期支払手形 OFC <sub>2</sub> , (借入金に準ずる負債)	0	4,725	0	11,178
譲渡税金等確定額 OFD <sub>1</sub> , (うち消費税に係る譲納分 OFD <sub>2</sub> )	8,063	2,741	12,633	34,452
うち社会保険料に係る譲納分 OFD <sub>3</sub> , (うち社会保険料に係る譲納分 OFD <sub>4</sub> )	0	0	5,109	20,482
うち社会保険料に係る譲納分 OFD <sub>5</sub> , (うちその他の OFD <sub>6</sub> )	4,154	394	8,652	9,486
うちその他の OFD <sub>6</sub> , (支払リース料 OFE <sub>1</sub> , (既発債・一般管理費分))	3,909	2,347	5,862	4,484
支払リース料 OFE <sub>2</sub> , (製造原価分)	0	0	0	0
固定資産処分損のうち草稿に係る処分額 OFF <sub>1</sub> , オフバランスリース資産確定額 OFG <sub>1</sub> , オフバランスリース未払金確定額 OFH <sub>1</sub> , (借入金に準ずる負債)	3,331	0	1,990	0
オフバランスリース未払金確定額 OFH <sub>2</sub> , (借入金に準ずる負債)	72,715	171,680	250,290	289,020
オフバランスリース未払金確定額 OFH <sub>3</sub> , (借入金に準ずる負債)	-	-	-	-
オフバランスリース資産に係る帳簿資産実施率定期 OFJ <sub>1</sub> , -	-	-	-	-

【図16】

科目/用	1997/03	1998/03	1999/03	(単位:千円)
	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
現金・預金余空計上確定額L <sub>1</sub>	0	0	0	0
受取手形貸倒・余空計上確定額L <sub>2</sub>	0	0	0	0
売掛金貸倒・余空計上確定額L <sub>3</sub>	0	0	0	0
売上債権貸倒・余空計上確定額L <sub>4</sub> (=L <sub>1</sub> +L <sub>2</sub> )	0	0	0	0
領収書無・売掛計上確定額L <sub>5</sub>	5,021	5,021	4,906	0
売上債権・領収資産余空計上等確定額小計L <sub>6</sub> (L <sub>6</sub> =L <sub>1</sub> +L <sub>5</sub> )	5,021	5,021	4,906	0
前渡をのうち換金可能額M <sub>1</sub>	0	0	0	0
未収入金のうち換金可能額M <sub>2</sub>	0	0	1,920	4,445
前払費用のうち換金可能額M <sub>3</sub>	0	0	1,643	2,158
収払金のうち換金可能額M <sub>4</sub>	0	0	0	0
短期貸付金のうち換金可能額M <sub>5</sub>	0	0	0	0
立替金のうち換金可能額M <sub>6</sub>	0	0	5	0
不渡手形のうち換金可能額M <sub>7</sub>	0	0	0	0
その他の流動資産のうち換金可能額M <sub>8</sub>	0	0	622	1,232
純資産不足額N <sub>1</sub>	98,000	98,000	109,302	64,032
有価証券貯蔵金P <sub>1</sub>	0	0	0	0
有価証券含み益P <sub>2</sub>	0	0	0	0
差引有価証券合み損P <sub>3</sub> (=P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> )	0	0	0	0
投資有価証券合み損P <sub>4</sub>	0	0	0	0
投資有価証券含み益P <sub>5</sub>	0	0	0	0
差引投資有価証券合み損P <sub>6</sub> (=P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> )	0	0	0	0
不動産合み損P <sub>7</sub>	0	0	0	0
合み損合計P <sub>8</sub> (=P <sub>3</sub> +P <sub>4</sub> +P <sub>5</sub> )	0	0	0	0
長期貸付金のうち換金可能額Q <sub>1</sub>	0	0	0	0
保険積立金のうち換金可能額Q <sub>2</sub>	22,792	22,792	22,353	24,134
差入保険金のうち換金可能額Q <sub>3</sub>	2,236	2,235	2,236	1,374
不渡手形・固定化資産償却のうち換金可能額Q <sub>4</sub>	0	0	0	0
その他の投資における不純金資産確定額R <sub>1</sub>	0	0	0	0
純延資産のうち換金可能額S <sub>1</sub>	0	0	240	881
借入金のうち代表者等借入T <sub>1</sub>	34,762	62,725	26,580	53,953
代表者等借入のうち自己資本相当額T <sub>2</sub>	34,762	62,725	26,580	24,842
第三者提供による担保の給付可能見込額T <sub>3</sub>	0	0	56,956	55,308
うち預金(定期預金和)T <sub>4</sub>	0	0	0	0
うち有価証券(短期投資相当)T <sub>5</sub>	0	0	0	0
うち本業外欠かせない不動産(純資本相当額)T <sub>6</sub>	0	0	0	0
うち本業以外の不動産(代表者の自宅等)T <sub>7</sub>	0	0	0	0
うち保証会社の保証T <sub>8</sub>	0	0	56,956	55,308
その他のT <sub>9</sub>	0	0	0	0
代表者等の当該企業からの収入U <sub>1</sub>	0	0	10,266	13,000
当該企業からの取入のうち多額と認められる金額計U <sub>2</sub>	0	0	0	1,200
うち社員報酬、手当、賞与U <sub>3</sub>	0	0	0	1,200
うち負賃収入U <sub>4</sub>	0	0	0	0
その他のU <sub>5</sub>	0	0	0	0
損失確定外収益U <sub>6</sub>	0	0	0	0
固定資産性預金△確定額V <sub>1</sub>	0	0	0	0

### 【図17】

【図18】

会計	販売・販促			販売・販促		
	1997/03/1	1998/03/1	1999/03/1	1997/03/1	1998/03/1	1999/03/1
販売・販促1	25,032	16,509	13,329	254	30,744	30,364
販売・販促2	2,362	360	0	0	0	11,105
販売・販促3	87,000	76,144	65,399	92,312	0	0
販売・販促4	0	0	0	0	0	0
販売・販促5	0	0	0	0	0	0
販売・販促6	0	0	0	0	0	0
販売・販促7	0	0	0	0	0	0
販売・販促8	0	0	0	0	0	0
販売・販促9	0	0	0	0	0	0
販売・販促10	5,602	1,021	4,908	0	0	0
販売・販促11	0	0	0	0	0	0
販売・販促12	0	0	0	0	0	0
販売・販促13	0	0	1,920	4,443	0	0
販売・販促14	37	27	1,843	2,110	0	0
販売・販促15	0	0	4,674	4,674	0	0
販売・販促16	0	0	0	0	0	0
販売・販促17	0	0	0	0	0	0
販売・販促18	0	0	0	0	0	0
販売・販促19	199	146	622	1,222	0	0
販売・販促20	0	0	0	0	0	0
販売・販促21	0	0	0	0	0	0
販売・販促22	0	0	0	0	0	0
販売・販促23	0	0	0	0	0	0
販売・販促24	0	0	0	0	0	0
販売・販促25	0	0	0	0	0	0
販売・販促26	700	700	75	0	0	0
販売・販促27	1,264	1,266	2,114	2,139	0	0
販売・販促28	0	0	0	0	0	0
販売・販促29	72,718	171,490	330,260	386,930	0	0
販売・販促30	0	0	0	0	0	0
合計 A <sub>1</sub>	94,779	93,734	96,865	100,876	0	0
販売・販促31	7,168	7,168	7,168	6,177	0	0
販売・販促32	102,776	108,270	116,146	106,933	0	0
販売・販促33	0	0	0	0	0	0
販売・販促34	0	0	0	0	0	0
販売・販促35	0	0	0	0	0	0
販売・販促36	700	700	75	0	0	0
販売・販促37	1,264	1,266	2,114	2,139	0	0
販売・販促38	0	0	0	0	0	0
販売・販促39	0	0	0	0	0	0
販売・販促40	0	0	0	0	0	0
販売・販促41	0	0	0	0	0	0
販売・販促42	0	0	0	0	0	0
販売・販促43	0	0	0	0	0	0
販売・販促44	0	0	0	0	0	0
販売・販促45	0	0	0	0	0	0
販売・販促46	0	0	0	0	0	0
販売・販促47	0	0	0	0	0	0
その他の48	0	0	0	0	0	0
合計 B <sub>1</sub>	9,289	9,223	9,223	9,223	0	0
販売・販促49	0	0	0	0	0	0
販売・販促50	0	0	0	0	0	0
販売・販促51	0	0	0	0	0	0
販売・販促52	0	0	0	0	0	0
販売・販促53	0	0	0	0	0	0
販売・販促54	0	0	0	0	0	0
販売・販促55	0	0	0	0	0	0
販売・販促56	0	0	0	0	0	0
販売・販促57	0	0	0	0	0	0
販売・販促58	0	0	0	0	0	0
販売・販促59	0	0	0	0	0	0
販売・販促60	0	0	0	0	0	0
販売・販促61	0	0	0	0	0	0
販売・販促62	0	0	0	0	0	0
販売・販促63	0	0	0	0	0	0
販売・販促64	0	0	0	0	0	0
販売・販促65	0	0	0	0	0	0
販売・販促66	0	0	0	0	0	0
販売・販促67	0	0	0	0	0	0
販売・販促68	0	0	0	0	0	0
販売・販促69	0	0	0	0	0	0
販売・販促70	0	0	0	0	0	0
販売・販促71	0	0	0	0	0	0
販売・販促72	0	0	0	0	0	0
販売・販促73	0	0	0	0	0	0
販売・販促74	0	0	0	0	0	0
販売・販促75	0	0	0	0	0	0
販売・販促76	0	0	0	0	0	0
販売・販促77	0	0	0	0	0	0
販売・販促78	0	0	0	0	0	0
販売・販促79	0	0	0	0	0	0
販売・販促80	0	0	0	0	0	0
販売・販促81	0	0	0	0	0	0
販売・販促82	0	0	0	0	0	0
販売・販促83	0	0	0	0	0	0
販売・販促84	0	0	0	0	0	0
販売・販促85	0	0	0	0	0	0
販売・販促86	0	0	0	0	0	0
販売・販促87	0	0	0	0	0	0
販売・販促88	0	0	0	0	0	0
販売・販促89	0	0	0	0	0	0
販売・販促90	0	0	0	0	0	0
販売・販促91	0	0	0	0	0	0
販売・販促92	0	0	0	0	0	0
販売・販促93	0	0	0	0	0	0
販売・販促94	0	0	0	0	0	0
販売・販促95	0	0	0	0	0	0
販売・販促96	0	0	0	0	0	0
販売・販促97	0	0	0	0	0	0
販売・販促98	0	0	0	0	0	0
販売・販促99	0	0	0	0	0	0
販売・販促100	0	0	0	0	0	0
合計 B <sub>2</sub>	182,116	200,581	277,899	400,230	0	0
販売・販促101	511	617	617	91	0	0
販売・販促102	3,026	2,400	21,631	11,182	0	0
販売・販促103	0	0	0	0	0	0
販売・販促104	22,762	22,762	22,563	24,134	0	0
販売・販促105	2,236	2,236	2,236	1,274	0	0
販売・販促106	0	0	0	0	0	0
販売・販促107	0	0	0	0	0	0
販売・販促108	0	0	0	0	0	0
販売・販促109	0	0	0	0	0	0
販売・販促110	0	0	0	0	0	0
販売・販促111	0	0	0	0	0	0
販売・販促112	0	0	0	0	0	0
販売・販促113	0	0	0	0	0	0
販売・販促114	0	0	0	0	0	0
販売・販促115	0	0	0	0	0	0
販売・販促116	0	0	0	0	0	0
販売・販促117	0	0	0	0	0	0
販売・販促118	0	0	0	0	0	0
販売・販促119	0	0	0	0	0	0
販売・販促120	0	0	0	0	0	0
販売・販促121	0	0	0	0	0	0
販売・販促122	0	0	0	0	0	0
販売・販促123	0	0	0	0	0	0
販売・販促124	0	0	0	0	0	0
販売・販促125	0	0	0	0	0	0
販売・販促126	0	0	0	0	0	0
販売・販促127	0	0	0	0	0	0
販売・販促128	0	0	0	0	0	0
販売・販促129	0	0	0	0	0	0
販売・販促130	0	0	0	0	0	0
販売・販促131	0	0	0	0	0	0
販売・販促132	0	0	0	0	0	0
販売・販促133	0	0	0	0	0	0
販売・販促134	0	0	0	0	0	0
販売・販促135	0	0	0	0	0	0
販売・販促136	0	0	0	0	0	0
販売・販促137	0	0	0	0	0	0
販売・販促138	0	0	0	0	0	0
販売・販促139	0	0	0	0	0	0
販売・販促140	0	0	0	0	0	0
販売・販促141	0	0	0	0	0	0
販売・販促142	0	0	0	0	0	0
販売・販促143	0	0	0	0	0	0
販売・販促144	0	0	0	0	0	0
販売・販促145	0	0	0	0	0	0
販売・販促146	0	0	0	0	0	0
販売・販促147	0	0	0	0	0	0
販売・販促148	0	0	0	0	0	0
販売・販促149	0	0	0	0	0	0
販売・販促150	0	0	0	0	0	0
販売・販促151	0	0	0	0	0	0
販売・販促152	0	0	0	0	0	0
販売・販促153	0	0	0	0	0	0
販売・販促154	0	0	0	0	0	0
販売・販促155	0	0	0	0	0	0
販売・販促156	0	0	0	0	0	0
販売・販促157	0	0	0	0	0	0
販売・販促158	0	0	0	0	0	0
販売・販促159	0	0	0	0	0	0
販売・販促160	0	0	0	0	0	0
販売・販促161	0	0	0	0	0	0
販売・販促162	0	0	0	0	0	0
販売・販促163	0	0	0	0	0	0
販売・販促164	0	0	0	0	0	0
販売・販促165	0	0	0	0	0	0
販売・販促166	0	0	0	0	0	0
販売・販促167	0	0	0	0	0	0
販売・販促168	0	0	0	0	0	0
販売・販促169	0	0	0	0	0	0
販売・販促170	0	0	0	0	0	0
販売・販促171	0	0	0	0	0	0
販売・販促172	0	0	0	0	0	0
販売・販促173	0	0	0	0	0	0
販売・販促174	0	0	0	0	0	0
販売・販促175	0	0	0	0	0	0
販売・販促176	0	0	0	0	0	0
販売・販促177	0	0	0	0	0	0
販売・販促178	0	0	0	0	0	0
販売・販促179	0	0	0	0	0	0
販売・販促180	0	0	0	0	0	0
販売・販促181	0	0	0	0	0	0
販売・販促182	0	0	0	0	0	0
販売・販促183	0	0	0	0	0	0
販売・販促184	0	0	0	0	0	0
販売・販促185	0	0	0	0	0	0
販売・販促186	0	0	0	0	0	0
販売・販促187	0	0	0	0	0	0
販売・販促188	0	0	0	0	0	0
販売・販促189	0	0	0	0	0	0
販売・販促190	0	0	0	0	0	0
販売・販促191	0	0	0	0	0	0
販売・販促192	0	0	0	0	0	0
販売・販促193	0	0	0	0	0	0
販売・販促194	0	0	0	0	0	0
販売・販促195	0	0	0	0	0	0
販売・販促196	0	0	0	0	0	0
販売・販促197	0	0	0	0	0	0
販売・販促198	0	0	0	0	0	0
販売・販促199	0	0	0	0	0	0
販売・販促200	0	0	0	0	0	0
合計 B <sub>3</sub>	26,000	26,000	26,000	26,000	0	0
販売・販促201	21,440	21,440	21,440	21,440	0	0
販売・販促202	26	26	26	26	0	0
販売・販促203	26	26	26	26	0	0
販売・販促204	0	0	0	0	0	0
販売・販促205	0					

【図20】

活動資産 A:	活動負債 D: オフバランス リース未払金 D
固定資産 B:	固定負債 E: オフバランス 未払リース未払金 E
オフバランス リース未払金 B	資本 G: その他の財産金のうち 出資判決金 H.
備販資産 C:	

固定負債 F: 出資者別に割り算出する不動産未払金の複数額 L その他の財産金のうち現金可動額 M 減額後却戻不足分 N 有形固定資産および不動産に係る積み戻 P 投資その他の(その他の投資を除く)のうち現金可動額 Q その他の会計における不動産未払金の複数額 R 備販資産のうちの現金可動額 S 代渡者等積入状況 T オフバランス利益 U 固定資産性預金 V
--

【図21】

修正活動資産 A <sub>1</sub> :	活動負債 D <sub>1</sub>
固定資産性預金 A <sub>2</sub> 元預金未払金 A <sub>3</sub>	固定負債 E <sub>1</sub> 代渡者等からの借入金 のうち自己資本相当額
修正固定資産 B <sub>1</sub>	資本 G <sub>1</sub> その他の財産金のうち 出資判決金 H <sub>1</sub> 未実現損失 H <sub>2</sub> (不動産未払金に係る 未実現損失額)
不動産固定資産 D <sub>1</sub> 修正総資産 C <sub>1</sub> 不動産未払金 C <sub>2</sub>	

(B)

修正活動資産 A <sub>1</sub> :	活動負債 D <sub>1</sub>
固定資産性預金 A <sub>2</sub>	固定負債 E <sub>1</sub>
修正固定資産 B <sub>1</sub>	代渡者等からの借入金 のうち自己資本相当額
修正純資産 C <sub>1</sub>	修正資本 G <sub>1</sub> その他の財産金のうち 修正出資判決金 H <sub>1</sub>

[图22]

(A)

第三回固定資本 A:	販売費負担 D:
みなし固定資本 B:	第三回固定資本 E:
自己資本負担金 A:	みなし自己資本 G:
固定費負担金 B:「販賣費負擔金」に「次か らG-L(販賣費)」を+する	代賣者からの借入金の うち自己資本を償還 E:
第三回固定資本 C:	代賣者からの借入金の うち自己資本を償還 E: +販賣費負擔金 G-L(販賣費) +G-L(販賣費)の利息 E:
不動産賃貸計算式: (A+B+C)	その後の借入金のうち 自己資本を償還 E:
	代賣者に対する手帳の 貸付金額に応じて定期的に 支拂う
	代賣者に対する手帳の 貸付金額に応じて定期的に 支拂う

(B)

修正民進党案 A <sub>1</sub>	決済会員 D <sub>2</sub>
みんな日本国債案 B <sub>1</sub>	修正国債負担 E <sub>2</sub>
みんな日本国債案 G <sub>1</sub>	みんな日本国債案 G <sub>2</sub>
西田高志公案 A <sub>2</sub>	西田高志公案 A <sub>2</sub>

【図23】

(A)

指標	得点
収益性 売上総経常利益率a	5~0
効率性 販賣本部比率b	5~0
安全性 現金比率c	5~0
安全性 固定長期借入金比率d	5~0
収益性 従業員収支比率e	5~0
成長性 売上高成長率f	5~0
成長性 当期利潤額推移率g	5~0
企業規模 自己資本額h	5~0



(B)

指標	得点	
健全性 不健全資産比率i	10~0	
収益性 純資本みなし当期利益率k	10~0	
	修正後期利益額l	5~0
流済能力 修正借入金等償還年数m	10~0	
健全性 みなし自己資本比率n	10~0	
	修正流動比率p	5~0
	修正従業員収支比率q	5~0
健全性 みなし自己資本額r	5~0	



(C)

指標	得点	
健全性 流動比率率差額s	0~▲10	
	従業員収支比率率差t	0~▲10
	修正売上高借入金等償還u	0~▲10
健全性 売上高減額償却不足額比率v	0~▲10	



(D)



【図24】

(A)

		単位	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
支 出 安 全 性 分 析	a 先上高経常利益率 (%)		4.93	2.04	0.90	▲0.88
	b 総資本回転率 (回)		1.089	1.266	0.903	0.895
	c 流動比率 (%)		27.51	25.62	54.15	49.17
	d 固定長期適合率 (%)		▲601.87	654.71	125.08	130.46
	e 繼常収支比率 (%)		102.98	102.07	103.46	107.16
成 長 性 分 析	f 先上高増移 (%)		1期増	2期減	1期増	1期増
	g 当期利益額推移 (%)		1期増	1期減	2期減	3期減
	h 自己資本額 (千円)		▲129,800	▲129,800	▲129,146	▲134,335
	i 先上高減額		-	-	-	-
	j 不健全資産比率 (%)		33.53	25.16	22.22	11.75
資 本 財 務 分 析	k 総資本みなしある利益率 (%)		▲12.24	▲18.31	▲19.16	▲10.39
	l みなし自己資本比率 (%)		▲68.43	▲41.42	▲42.17	▲31.84
	m 繼正借入金等償還年数 (年)		8.66	11.85	13.74	7.22
	n 繼正長期借入金等償還年数 (年)		23.57	23.30	49.52	49.07
	o 繼正純資収支比率 (%)		106.35	102.04	101.40	116.20
収 益 性 分 析	p 繼正流動比率 (%)		▲74,327	▲90,953	▲115,556	▲69,221
	q 繼正当期利益額 (千円)		-	-	-	-
	r みなし自己資本額 (千円)		▲211,391	▲170,822	▲216,776	▲173,595
	s 先上高減額		-	-	-	-
	t 繼常収支比率差額 (%)		▲2.37	0.03	2.06	▲9.04
粉 飾 等 調 整	u 繼正後先上高借入金等比率 (倍)		0.49	0.61	0.97	0.98
	v 先上高減額額不足額比率 (%)		14.82	15.56	20.41	10.82
	w 先上高減額額不足額比率 (%)		-	-	-	-
	x 先上高減額額不足額比率 (%)		-	-	-	-
	y 先上高減額額不足額比率 (%)		-	-	-	-

(B)

		得点	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
支 出 安 全 性 分 析	a 先上高経常利益率 (%)	5	4.50	3.50	2.50	2.25
	b 総資本回転率	5	2.00	2.50	1.50	1.80
	c 流動比率	5	0.00	0.00	0.00	0.00
	d 固定長期適合率	5	0.00	0.00	1.75	1.75
	e 繼常収支比率	5	3.00	3.00	3.00	3.50
成 長 性 分 析	f 先上高増移 (%)	5	3.00	2.00	1.50	3.00
	g 当期利益額推移 (%)	5	3.00	2.00	1.50	0.00
	h 自己資本額	5	1.25	1.25	1.25	1.25
	得点小計	40	16.75	14.25	13.00	13.25
	j 不健全資産比率	10	0.00	0.00	0.00	5.00
資 本 財 務 分 析	k 総資本みなしある利益率	10	1.00	0.00	0.00	1.50
	l みなし自己資本比率	10	0.00	0.00	0.00	0.00
	m 繼正借入金等償還年数	10	6.00	5.00	3.50	7.00
	n 繼正流動比率	5	0.75	0.75	1.50	1.50
	o 繼正純資収支比率	8	4.00	3.50	3.80	5.00
収 益 性 分 析	p 繼正当期利益額	8	1.25	0.75	0.50	1.25
	q 繼正当期利益額	5	1.00	1.25	0.75	1.25
	得点小計	60	14.00	11.25	9.75	22.50
	s 流動比率差額	▲10	0.00	0.00	0.00	0.00
	t 繼常収支比率差額	▲10	0.00	0.00	0.00	0.00
粉 飾 等 調 整	u 繼正後先上高借入金等比率	▲10	0.00	0.00	0.00	0.00
	v 先上高減額額不足額比率 (%)	▲10	▲7.00	▲7.00	▲10.00	▲5.00
	得点小計	40	▲7.00	▲7.00	▲10.00	▲5.00
	財務得点合計	100	23.75	18.50	12.75	30.75
	財務得点に基づく格付ランク	D2	D3	E	C4	

【図25】

(A) (単位:千円)

B / S	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
流动資産 A <sub>1</sub>	94,779	93,724	98,595	100,939
固定資産 B <sub>1</sub>	141,376	146,977	164,946	164,156
総資産 C <sub>1</sub>	26	26	240	881
資産計 T <sub>8</sub>	236,181	240,727	263,781	255,976
流动負債 D <sub>1</sub>	329,924	381,582	132,024	147,484
固定負債 E <sub>1</sub>	48,860	38,995	260,903	242,827
特別法上の準備金 F <sub>1</sub>	0	0	0	0
資本 G <sub>1</sub>	△142,593	△129,800	△129,146	△134,335
(うち当期利益 H <sub>1</sub> )	29,233	12,794	654	△5,189
負債・資本計 T <sub>9</sub>	236,181	240,727	263,781	255,976

(B)

オフバランス B / S	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
流动資産 A <sub>1</sub>	94,779	93,724	98,595	100,939
固定資産 B <sub>1</sub>	214,091	318,657	415,236	443,176
(うちオフバランスリース資産 OB)	72,715	171,680	250,290	289,020
総資産 C <sub>1</sub>	26	26	240	881
資産計 T <sub>8</sub> '	308,896	412,407	514,071	544,996
流动負債 D <sub>1</sub>	344,467	366,868	182,082	205,288
(うちオフバランスリース未払金 OD)	14,543	34,336	50,058	57,804
固定負債 E <sub>1</sub>	107,022	176,339	461,135	474,043
(うちオフバランス長期リース未払金 OE)	58,172	137,344	200,232	231,216
特別法上の準備金 F <sub>1</sub>	0	0	0	0
資本 G <sub>1</sub>	△142,593	△129,800	△129,146	△134,335
(うち当期利益 H <sub>1</sub> )	29,233	12,794	654	△5,189
負債・資本計 T <sub>9</sub> '	308,896	412,407	514,071	544,996

【図26】

(A)

不純金資産	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
不純金流動資産 A <sub>4</sub>	5,634	5,721	4,908	0
不純金固定資産 B <sub>4</sub>	98,000	98,000	109,302	64,032
不純金総資産 C <sub>4</sub>	26	26	0	0
不純金資産計 T <sub>4</sub>	103,660	103,747	114,210	64,032

(B)

修正 B / S	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
修正流動資産 A <sub>5</sub>	81,182	85,262	90,158	100,735
固定資産性預金 A <sub>5</sub>	8,063	2,741	3,529	204
修正固定資産 B <sub>5</sub>	116,091	220,657	305,934	379,144
修正総資産 C <sub>5</sub>	0	0	240	881
修正資産計 T <sub>5</sub> "	205,336	308,660	399,861	480,964
流動負債 D <sub>5</sub>	344,467	365,868	182,082	205,288
固定負債 E <sub>5</sub>	107,022	176,339	461,135	474,043
(うち自己資本相当額 E <sub>5</sub> )	34,762	62,725	26,580	24,842
特別法上の準備金 F <sub>5</sub>	0	0	0	0
修正資本 G <sub>5</sub>	△246,153	△233,547	△243,856	△198,867
(うち修正当期利益 H <sub>5</sub> )	△74,327	△90,953	△113,556	△69,221
負債・修正資本計 T <sub>5</sub> "	205,336	308,660	399,861	480,964

(C)

総外加喫 B / S	1997/03	1998/03	1999/03	2000/03
修正流動資産 A <sub>5</sub>	81,182	85,262	90,158	100,735
みなし固定資産 B <sub>5</sub>	124,154	223,398	309,463	379,348
(うち固定資産性預金 A <sub>5</sub> )	8,063	2,741	3,529	204
(うち現物出資相当額 T <sub>5</sub> +T <sub>5</sub> +T <sub>5</sub> )	0	0	0	0
修正総延資産 C <sub>5</sub>	0	0	240	881
修正資産計 T <sub>5</sub> "	205,336	308,660	399,861	480,964
流動負債 D <sub>5</sub>	344,467	365,868	182,082	205,288
修正固定負債 E <sub>5</sub>	72,260	113,614	434,555	449,201
特別法上の準備金 F <sub>5</sub>	0	0	0	0
みなし自己資本 G <sub>5</sub>	△211,391	△170,822	△216,776	△173,525
(うち自己資本相当額 E <sub>5</sub> )	34,762	62,725	26,580	24,842
(うち現物出資相当額 T <sub>5</sub> +T <sub>5</sub> +T <sub>5</sub> )	0	0	0	0
(うち修正当期利益 H <sub>5</sub> )	△74,327	△90,953	△113,556	△69,221
負債・修正資本計 T <sub>5</sub> "	205,336	308,660	399,861	480,964
多額の役員報酬等調整額 U <sub>5</sub>	0	0	0	1,200
未実現特別損失 U <sub>5</sub>	0	0	0	0